

帝國新讀本卷二

3159
11a7
資料室

教科
41
200

41562

教科書文庫

4
810
41-1925
2000301559

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

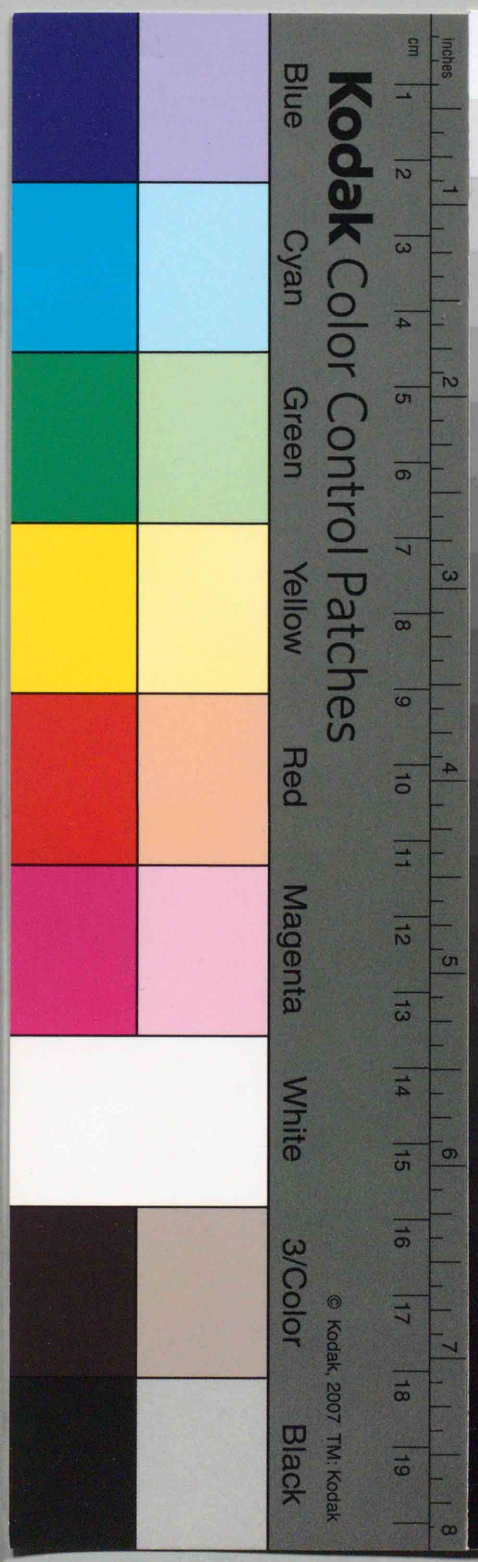
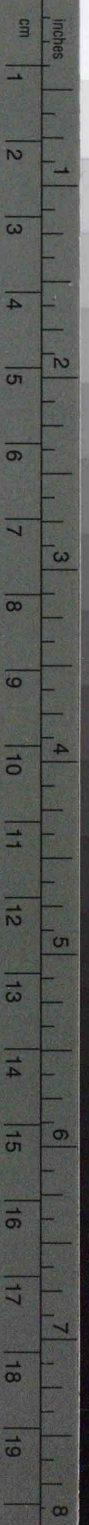


© Kodak, 2007 TM: Kodak

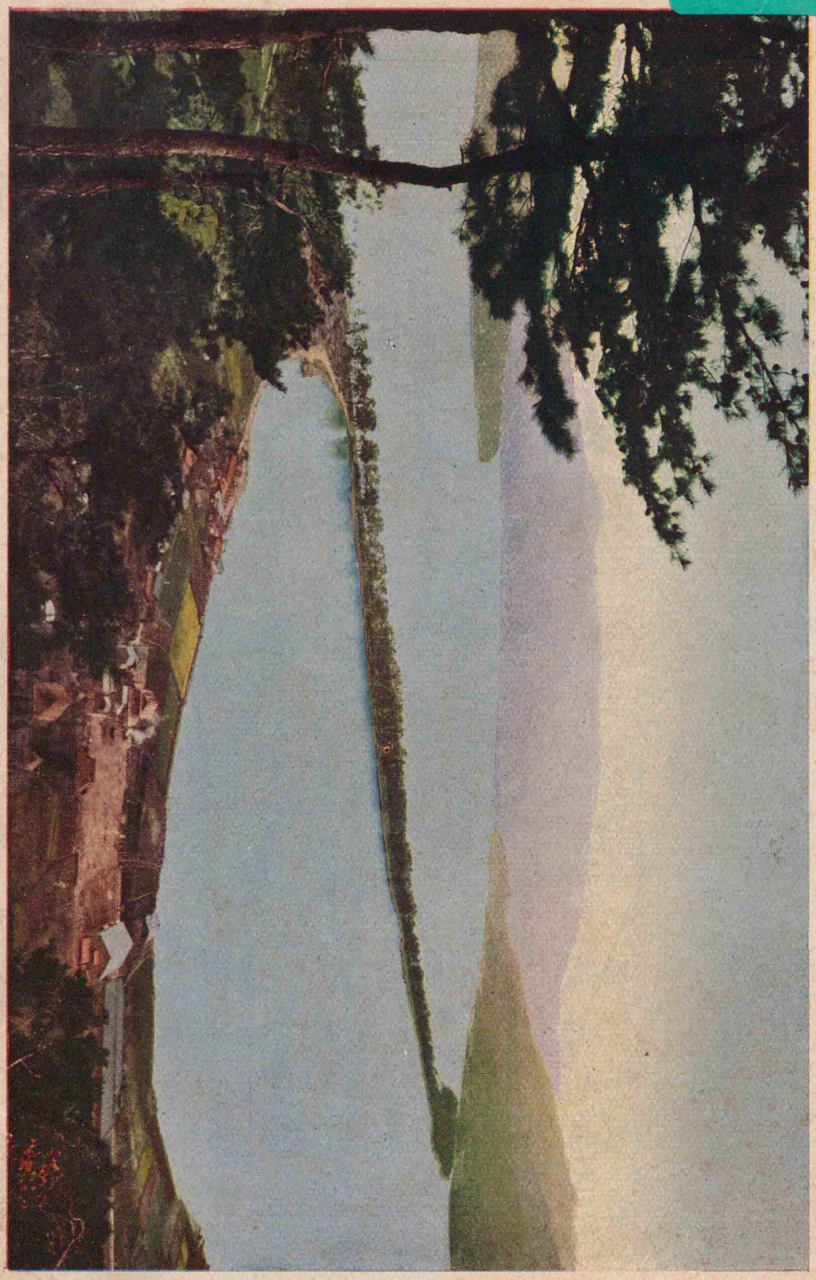
Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak



教科書文庫
4
810
41-1925
2000301559



立橋の天

資料室

370.9
Ha7

日六十月二年四十正大

濟定檢省部文

文學博士芳賀矢一編

帝國新讀本

東京

合資
會社 富山房發兌



帝國新讀本 卷二

目次

一月雪花	一
二 歌話	六
一 とりゐ坂	
二 あがたの宿	
三 焼野の原	
頓智五題(自修文)	10
一 ラ・フォンテーヌの果物	

目次

広島大学図書

2000301559



二	辛抱と強情	
三	冷たい慰藉	
四	ばか	
五	頓智	
三	蟲の聲	一三
四	鱒釣	一七
五	小さな旅人	二四
	渡鳥	三一
六	朝鮮雜觀 その一	三三
七	朝鮮雜觀 その二	三七
八	八道の山	四四

	兎狩(自修文)	四六
九	冬の來る頃	四九
	一 霜	
	二 木枯	
	三 時雨	
一〇	鞍馬の火祭	五四
一一	入營	六一
一二	無線電信の發明	六五
一三	機械と道具と人間の手	七〇
	三人の時計(自修文)	七七
一四	三都氣質	八三

一五 ロンドンだより……………九二

一六 大阪……………七

一七 伊能忠敬の晩學……………一〇三

一八 藤樹先生……………一一〇

 最も偉大な豪傑(自修文)……………一二六

一九 新年……………一二三

二〇 お日様の船出……………一二六

二一 日章旗と水戸烈公……………一二八

二二 伊勢神宮……………一三四

二三 大石良雄 その一……………一三七

二四 大石良雄 その二……………一四二

二五 露都の四季……………一四九

 熊 狩(自修文)……………一五五

二六 北國の初春……………一六二

二七 三等列車……………一六五

二八 雨 後……………一七二

二九 太陽と春……………一七四

三〇 子供等……………一七六

 ポ チ(自修文)……………一八〇

三一 松と大和心……………一八五

三二 聖徳太子……………一九〇

三三 皇室と國民……………一九五

三四 君が御代……………一六

目次終

帝國新讀本 卷二

一月雪花

春はハナミ、夏はスミ、秋はツキミ、冬はユキミ、夏のみだ
けが、月雪花三つの眺に關係はないが、夏の月夜の涼は又格
別に快い。春の花見は昔の大宮人にも、今の丁稚小僧にも、一
大歡樂である。芋栗を捧げて秋の月を祭る風俗は、一般國民
的の雅興である。お月様いくつ。の俚歌、雪よふれふれ。の童謡、
月雪花の風流は子供の時から教へられて、我等の頭にしみ

雅興
風流

歴史的懷舊

こんで居るのである。
月雪花を見て感ずるのは、歴史的懷舊の念が添ふからである。我が國の櫻花は、唐人も高麗人も美しいといふに違ないが、彼等の感ずるところと、我が國民の感ずるところには大きな逕庭がある。米國人は觀月といふことに關しては、殆ど何の興味ももつて居らぬ。我等は子供の時から月雪花で教育せられた。月雪花を弄ぶといふ詩的教育を受けて來たのである。

塵世
隱遁
皎々
皓々

風流の眞義は塵世を忘れることである。全く塵世を忘れて活動社會を離れることは隱遁者の所行であるが、少くとも皎々たる明月、皓々たる白雪、雲の如く霞の如き花に對し

利慾に營々たり

て、これを眺めて居る間は、いかなる人も利慾に營々たる實社會を忘れるのである。月雪花の効用は美術と同じく、人を高尚にし、人を温雅にするのである。

叢雲

我等日本人は月雪花を大いに觀賞して、これを人事と結合した。高尚な人格はこれを月雪花に譬へる。月に叢雲、花に風。月の入るのや、雪の消えるのや、花の散るのは、これを人の蹉跌や死去に譬へる。さうして繁榮、隆昌、幸福は月雪花の美に比較した。古來の吟詠はすべてこの譬喩法を用ひて居る。我等は月雪花を尊敬し、月雪花に種々な美德を附加する。無情の物を有情化した上、更にこれを有徳化するのである。月は公平無私、寸毫も汚のないものとして、光風霽月などと

吟詠
譬喩

有情化
有徳化
光風霽月

赤心
邪佞
なぞらふ

水潔
嚴肅

聯想

節義

(一)武藏の人。群
書類從の編者
文政四年(一
四八一年)歿
年七十六。

熟語せられて、君子人の赤心に比べられる。月を蔽ふ雲はその光明を掩ふものとして、小人邪佞の徒になぞらへられる。又雪は氷潔一點の塵のないことから、冷たい嚴肅なところを見て、潔白な精神や節操の動かないことを聯想する。花は爛漫たる美しさの、忽ち風に散行くのを惜しんで、節義の士が身命を抛つのに譬へる。月や雪や、花やに靈があつて、これ等の徳を備へて居るやうに感ずるのである。古人がかく感じ來つたそのまゝを我等は承繼いで、我等もさう感ずるのである。

月雪花を鑑賞し得る我等は幸福である。盲人の學者塙保己一の逸事として傳はつて居る話に、或時月明に對して、

(一)紫宸殿のこと。

花ならば探りても見ん(けふの月)探りても見ん(けふの月)といひ、また京都に上つた時、御所の南殿の櫻の花盛と聞いて、



一 已 保 塙

目に見ねばせめて

なでんの櫻かな

と戯れたさうである。東海道で富士

山の下を通る時には、

言の葉のおよばぬ身には目に見ぬも

なか／＼よしや雪のふじのね

といった。

月雪花の眺を恣にすることの出来ない民族は不幸であ

民族

傳説

品性
國民性

髣髴

肉眼

心眼

る。月雪花があつても、これに附加せられた傳説のない國民も亦人生の興味は少い。我等は月雪花に對して、古來の文學を味はひ、國家を思ひ、品性を養ひ、國民性を知ることが出来る。月雪花を通じて、我が國民の歴史は髣髴として眼前に浮かぶのである。保己一は肉眼を以ての月雪花は見なかつたが、心眼を以ての月雪花は眺め得たのである。

二 歌 話

中村秋香

一 とりる坂

白河樂翁公、年十二にてなほ田安の邸におはせし頃、麻布鳥居坂なる戸川内膳の邸宅より火起り、その邊の町家類焼

(一)松平越中守定
信 白河の城主。後、老中となつた。文政十二年(二四年)歿。年七十二。
(二)江戸城田安門内類焼



松平定信

しけり。大火といふまでにもあらざりしかど、焼死せしもの多かりしかば、

この火事は人の命をとりるさか

怪我事なりこれよりうへの

とがはないせん

と落首せるものありけり。近侍の人

人興じ笑ひて、いかにもよく詠みたり。」と評し合ひけるを、君

聞き給ひて、余が詠まんにはさはいはじ。」とありければ、奥醫

師の某、「さらば何とか詠ませ給ふ。」と問ひまゐるに、言は

じ、言はじ。」と強ひ給ふを、強ひて問ひまゐらせたりしかば、

すまふ

落首

顛倒

梅檀の二葉

「四の句を『怪我の事なり。』といふべきなり。」とあり。

一句の事にて、一首の意味を全く顛倒せしめ、過のやみ難きに出づるを明らかにせられしこと、誠に「梅檀の二葉」とぞ

いふべき。

二 あがたの宿

(一)櫻町天皇の御代。今より約百八十年前。

(二)江戸の國學者岡部氏。家を縣居と號する。明和六年(一七六八)四月二十九日歿。年七十三。



賀 茂 眞 淵

延享某の年の秋、江戸大風雨に於て、市中所々の人家破損しける。あけの日、賀茂眞淵翁の許へ、門人某見まひに行きけるに、翁の家も夜

狼藉たり

來の風にて、屋根大方吹きまくられ、日光席にさし入り、屋根板狼藉たる中に、翁は平常に異なるさまもなく、机によりて

沈思

會釋

野分

沈思吟詠せり。烈しき風雨にも候ひしかな。といふ聲を聞き、始めて某の來れるを知りけん、顧て會釋しつゝ、餘談に及ばず、「この嵐にて一首出で來ぬ。」とて、書きて示しける歌、

野分してあがたの宿はあれにけり

つき見に來よと誰にいはまし。

三 燒野の原

(一)天明の火災にて、小澤蘆庵が家

危くなりし時、翁、人々に告げて、他の品は皆焼きても苦しからず。ただ書籍だけは一冊も多く出し給はれ。」とて、自身も年來の鈔録本を風呂敷包にし、これを負ひ



小澤蘆庵

(一)光格天皇の御代。火災は天明八年(一七八八)四月八日。二四

(二)京都の歌人。享和元年(一八〇一)四月六日歿。年七十九。

鈔録本

(一)山城國葛野郡。京都市の西郊。

て、太秦なるしるべの家に避けぬ。この火にて内裏の炎上せし由を聞き、いたく歎きて、翌日未明に太秦を出で、内裏の焼跡を拜し奉りて、

けさ見れば焼野の原となりにけり
これやきのふの玉しきの庭。

—新説歌がたり—

(二)法學博士。東京帝國大學農科大學教授。大正八年歿、年六十。

寓話 或教訓や思想を物に寓して表した譬喩談
(三)La Fontaine (西曆一六二一年—一六九五)年。爐棚 ストープの上方に突出した棚

頓智五題 (自修文)

(二) 和田垣謙三

一 ラ・フォンテーヌの果物

フランスの寓話作者ラ・フォンテーヌは、毎朝食事後に果物を食べる習慣があつた。或朝のこと、後でと思つて、一個の梨を爐棚の上に載せて置いて、ちよつと書齋へ行つた。その間に一人の友人が來

件 りの。れのい。

何食はぬ顔 そしらぬ顔

因業 無情。我のつよいこと。



ヌーテン、フ・ラ

訪したので、室へ通した。彼が再びその室へ來て見ると、件の梨が見えぬ。「おや、誰か梨を食べてしまつたかしら。」訪問客は何食はぬ顔で、「僕ではないよ。」君てなくつて幸だ。實は鼠を退治しようと思つて、あの梨へ亞砒酸を入れて置いたのだ。友人驚いて、「そりや大變だ。解毒劑はないか。」安心し給へ。今のは梨どろばうを見出す爲の僕の計略だつたよ。」

二 辛抱と強情

或老人の馬車と、因業な青年の馬車が、長い狭い山路の一角で、ばつたり行合つた。老人の方は後戻するには七八町も行かねばならず、青年の方は僅か半町ばかりに過ぎなかつたが、青年は敢へて後戻することを肯じない。ものの半時間も睨み合つた擧句、青年は老人を凹ましくれんものと、悠然と新聞を讀始めた。老人、新聞があいたら貸して下さい。青年は終に引返した。

頓智五題 (自修文)

命旦夕に迫る
死に迫る
債權者
金を貸した人。

三 冷たい慰藉

命旦夕に迫れる病人、親切らしく訪ねて来た債權者に向かひ、今度いふ今度こそはもうだめだ。債權者、何をばかな。しつかりなさい。返濟の義務の完結しない中は、何でそんな事があるものですか。」

四 ばか

或人の言へるやう、男子苟も志を得ずんば、寧ろ貝賣とならんかな。都大路を横行濶歩して「ばか。大ばか。」と天下を罵倒して暮す、また快ならずや。」と。そこで「ばかはよしか。大ばか。大ばか。」と叫びながら歩いた。さうすると「ばか屋さん。」とどこからか呼んだ。彼は自分がばか屋呼ばはりされたので、頗る不平で堪らぬ。そこで振向いて「ばかはどちらさまです。」と反問した。はい、こちらです。」

五 頓智

或人、君公の逆鱗に觸れ、不屈千萬、覺悟せよ。」といふ嚴命を蒙つた。彼額を地につけて、どうぞ命だけは御慈悲を以て御助け下さるや

逆鱗
君公のいかり。
不屈千萬
この上のないやうにこなひ。

反問す
こたへす。

失笑す
ふきだす。

う。」と歎願に及んだ。それは相成らぬ。しかし死に方は汝の望どほりにしてつかはす。いかにして死にたきか、即答せよ。彼鬨るく頭を上げて、昔に變らぬ御慈悲、有難う存じます。願はくは老病で死にたく御座います。王は失笑して、遂に命を助けられた。——外遊スケッチ——

三 蟲の聲

沼波瓊音

私は一年の中で秋が一番好きだ。なぜ生きてゐるか。どういふ目的で生きてゐるか。」と問はれ、ば、秋を味はふのが生存の一つの目的だ。」と答へるくらゐに、私は秋を好ましく思ふ。私が秋に對して感ずる心持はどうかといふに、荒立つた後に來る澄んだ心持である。悲しいとか、腹立たしいとか、感情が激しく動いた後に、非常に靜かな落着いた心持になる。

荒ぶ
發心

その荒立つた感情の後に來る心持、それが秋の心持である。兵士が劇しい荒びた戦争に飽きて發心した心持にでもたとへようか。とにかく細かく、優しく、そして澄んだ感じである。

風物

かういふ心持は、秋の風物の何物にでも現れてゐる。物の形でいへば、日光、月光、雲、草花など、それ等のものにもこの心持は著しく現れてゐる。匂でいふと木の花、觸覺に感ずるものでは冷たい風、聽覺に來るものでは蟲の音。そのすべてに前に述べた秋の感じは現れてゐるが、殊に蟲の音に最も著しく現れてゐる。

耳に觸れるものでは、春はいろ／＼な小鳥が啼くし、夏の

外的
內的

盛には蟬が鳴くけれども、蟬の聲は却つてうるさいものである。秋の蟲の音を聞く心持は、春のおぼろ夜に鳴く蛙の聲を聞く心持にも比べられるが、蛙の聲は卑俗で、單調で、蟲の音ほど複雑な、優美な、そして細かな感じを起させない。その點に於て蟲の音は最優等で、前に述べた秋の感じなり、味はひなりを一番深く表してゐる。小鳥の聲だとか、蟬の聲だとかは、外的とでもいふのか、外に現れるやうな趣を持つてゐるが、蟲の音は內的である。蟲の音を聞くと、心の眼が内に向かつて開くやうな氣持がする。

季題

衝動

蟲の音は俳句では秋の季題になつてゐるが、實際は土用の中から鳴き始める。それもいい。秋に入つて月夜に鳴くの

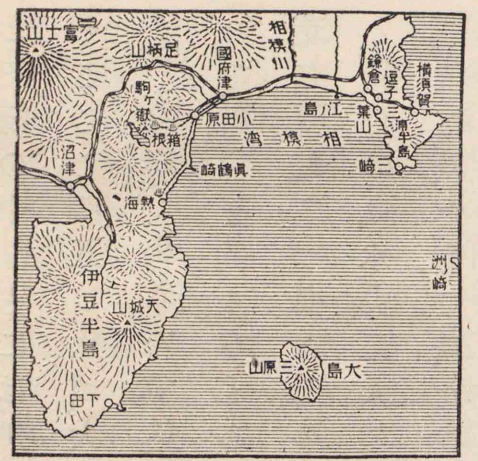
情趣

もいい。闇夜に鳴くのもよく、又聞きながら眠に入るのもよく、夜中にふと目覺めて聞くのも趣がある。朝早く聞く、暗れた日の晝間聞く、雨の降る日に聞く、それ／＼ちがった情趣と味はひがある。殊に夜汽車にでも乗つて行くと、或淋しい驛に着いて、ふと蟲の音を聞くことがあるが、旅のあはれも一入覺えられて、深い味はひがある。又夜の銀座の明るい賑やかな通を歩いてゐて、ちよつと細い暗い路地に入ると、足許で蟲の音がしてゐる。趣が更に深い。それから秋每晚蟲の音を聞いて、それが冬の初になつて、今まで蟲の音に慣れてゐた耳に、全くなんの音も入らないのに氣づく、堪らなく寂寥を覺えるものである。

しる椿

四 鱒 釣

もはや三時過でもあらうか、日は西にまはつて、海の上に



白金の柱が横たはつた。良い時候だ。陸の方から北風がひやり／＼海面を撫でて、舟底を敲くほどの漣を立ててゐる。鱗形の雲が青空の上に銀の波をうたせ、海はその影を浮かべて、漾々／＼揺いでゐる。富士、江島、足柄、箱根、真鶴、崎から

様々 (一)相模國鎌倉郡川口村陸を去る數町 (二)相模國足柄上郡駿河と南箱根に連る (三)足柄下の相模灣を隔てて三浦半島と對す (四)箱根より來り南方賀茂兩郡に亘る

四 鱒 釣

一七

(一)相模國三浦郡
 (二)三浦郡三崎町
 西方相模灣に
 面する。
 (三)相模國の東南
 に斗出する。
 (四)Pen.
 (五)Period.
 (六)Dash.

(七)三浦郡。鎌倉
 の東南約一里。
 (八)逗子海岸にあ
 る不動堂。

と近くて葉山、遠くて三崎、三浦半島は縦に短く走つて、天城
 と三崎の中ほどには、伊豆の大島がほのかに見える。白帆が
 そこここに五つ六つ。大島の方角に、ペン尖でうつつた^(五)の如
 く、^(六)の如く小さいのは、鯉を釣る舟であらう。つい一町許離
 れて、針魚を釣る舟もある。いっどこから湧出したか、笹の一
 葉に黒蟻二つ載せたやうなものが見える。やはり舟だ。黒蟻
 と見たのは水夫二人で、せつせと漕いでゐるのだ。
 秋だ。秋だ。實に秋だ。つい背後の逗子の山々も、心から少
 し鶯色になつたやうだ。不動様の邊に頻りに百舌の啼くの
 が聞える。葉山から逗子の停車場に通ふがた馬車の喇叭の
 音が聞える。

獵銃がないと見くびつたものか、つい四五間先へ鴨が一
 羽下りて、時々水に潜つては鯉をくはへて出て、人間は不器
 用なものだ。と、さも嘲り顔に此方に向いて胸を突出して、^(八)
 悠揚^(九)らゆら波に浮いてゐる。

さうかうするうちに、笹の一葉と見えた舟は、次第に近く
 漕いで来て、我々の舟から三四十間離れて、碇を下して釣始
 めた。針魚を釣つてゐた舟も一艘その側に寄つて来た。我々
 も碇を上げて、舟をその方角に移した。

釣瓶落といふ秋の日は、箱根の駒ヶ嶽の上に落掛つて、富
 士の頭は早紫に染まつて来た。風はすつかり風いで、落日の
 影はゆらゆらと水の上に金を流してゐる。百舌も啼きやん

つるべおと

渺々

で、陸の方に啞々と鳥の聲が聞え始めた。實に靜かな秋の夕だ。空高く海渺々として、風なく、波なく、夕日の光が獨りこの間に充ち満ちてゐる。

忽ち「からん」我々の一人が絲をかけて置いた針金の鈴が一つ鳴つたかと思ふと、「からんく〜」「りんく〜」と二つ三つ四つ續けざまに鳴つた。來たな。繰上げる絲の末を見ると、果して鶯茶の背に、銀色の腹をした、眼の大きな、口の透通つた五寸くらゐなやつが、潑刺と上つて來た。と見るうちに、今度は自分の指先にかけてした絲がびくりしめた。絲を手繰ると、重い大きいぞ。それ上つた。まる鱒だ。一尺はたつぶりあらう。さあ釣れだした。三艘の舟が三の字に並んで、餌をつけるはふり

潑刺

枚を銜む

こむ、手繰る。いはゆる膚撓せず、目逃せず、枚を銜むといふ格では、や蔭深く成行く水の上に伸びかゝつて、繰下し、引きあげる。隣の舟でどぶんと鉛錘をはふりこむ音。此方の舟で手繰る絲の舷側に軋る音。釣上げられた魚のばた〜、舟板の上に跳ねては、生簀の水にとびこむ音。

「いや、此奴ア大きい。ちよ、ちよ、ちよつと、そのた、攪網を。」一人が遽しく叫ぶ。すくひ上げて見ると、何だ、目張の大きいのだ。

「とうく〜かゝつたな。」ともう一人が胴の間で獨語するのを顧ると、黒鯛を釣上げてゐる。黒鯛先生先刻までは餌を繞つて、敢へてくはなかつたが、終に夕蔭になつて、眼が眩んだ

と見える。

破れた沈黙は又もとに復つて、又暫く釣つてゐると、大方葉山の寺で撞出したのであらう、暮の鐘が一つぼーんと海面に響いて來た。

「どうです、もうしまひませうかね。」と一人が空を仰いだ。

「さうですね。」と飽足らぬ溜息一つ。眼を上げると、いつの間にか日は入つて、富士から相豆の連山は、入日のあとの卵色の空に、^(一)印度藍の波をうねらして、まだはつきりと輪郭を見せてゐるが、ついその葉山、逗子の山々は、すでに夕靄がかつた。手を洗ふ潮水はさながら温湯だ。しかし海氣は冷えて來たので、我々は古外套の襟を立てた。大島も最早見えな

[Indigo.

い。鯉舟の歸るのであらう、舟は見えぬが、えッしヨ、えッしヨ、えッしヨ。[艫拍子が遙かに聞える。

^(一)逗子町の中。
^(二)同。

他の二艘も碇を上げて、一艘は小坪へ、一艘は新宿へ歸つて行く。我々も道具を収めて、富士に見送られて、紫流す水をゆる／＼に分けて行く。最早暮れた海の上はまた明るい、行く方は濱も、松林も、人家も、夕餉の煙も、山も、茫とした一つの色に融合つて、たゞぼんやりとしてゐる。艫聲の絶間を、三聲四聲高く雁が啼いて通つた。

^(三)逗子町を流れる田越川の口。

川口近くなつて山の陰に入ると、驚いた、鰯が跳ねては、眞黒な水に白く環をゑがく。

火光がちら／＼見えだした。

——徳富蘆花の文による——

五 小さな旅人

薄田泣堇

私たちが七つ八つの頃には、そろ／＼秋が更けて來ると、
晴れきつた空を毎日のやうに雁が渡つた。私たちはそれを
見かけると、吹きさらしの野路に立つて、空の一方を振仰ぎ
ながら、

吹きさらし

雁よ棹さそになれ。

棹さそになつたら鉤かぎになれ。

と、その長い行列が漸次に雲の中ににじみこんでしまふま
で、聲を涸して叫んだものだ。が、いつの間にか雁も少なくなつ
て、今では晝間その長い列が空を渡ることは、よく／＼人氣

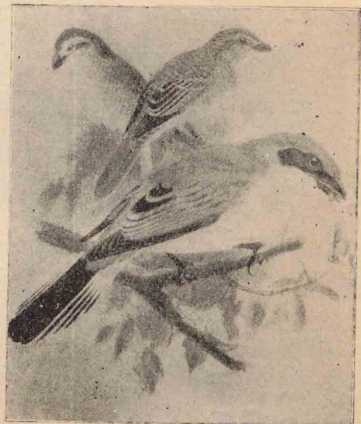
青森灣頭室蘭運船待合境内に渡來した椋鳥 (寫眞)



鳥 渡

遠い野原かどこかでないと、めつたに見られなくなつた。

その頃はまた後の岡に行つて見ると、葉の落ちかゝつた



雑木林に、小鳥が澤山來てゐたものだ。小鳥といふと、私は海などを越えて來る彼の小さな旅人のあわたましい旅を考へて、いつも言はうやうのない淋しい旅心地を覚える。

まづ百舌が來る。秋の彼岸が過ぎて、そろ／＼日影が黄色がかつて來ようといふ頃、私たちはどうかすると暖い日の午過、そこらの木立て、甲高い鋭いその聲を聞くことがある。

矮小

「あゝ、もう秋だな。」と思はず振反つて見ると、矮小な櫟にまじつて、ずばぬけて背の高い榆の木に百舌が一羽止つて、黄色い夕陽を受けて、羽が金のやうにきら／＼してゐるのが見える。私たちはその瞬間、言はうやうのない強い健かな氣持が胸に流れるのを覺える。

次には鷓が来る。山家の午過、懶さうな蟋蟀の聲もいつの間にか止んで、枯葉一つ寝返を打つ音までがはつきりと耳に入る。静けさの底に、どこやら窶れた人の溜息とでもいつたやうな微な聲が洩れて来て、何の音ともわからない。すると、樹蔭の萑畑かどこかで、餘念もなくせつせと仕事に精出してゐた農夫が、ひよいと顔を擧げる拍子に、すぐ鼻先の小

枝から、枯葉のやうな小鳥がついと身をそらして、逃げてい



つてしまふ。それが鷓だ。

ひ鷓といつたら、まるで悲哀たを抱いてゐる人のやうに、大抵は連に離れて、たゞ一人で出て来る。そしてそこらの小

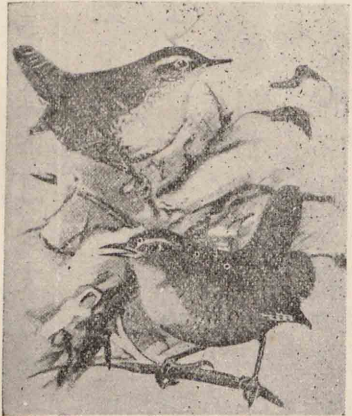
枝に止るなり、何か眼に見えぬ昔馴染でも招くやうに、ひよくり、ひよくりと軽い御辭儀をして、さゝやくやうな聲で唄ひだす。私はそれを見ると、他の爲、世の中の爲といつたやうなわけではなく、自分一人の爲に唄つて、それで満足してゐる人たちを思ひ出さずにはゐられない。

鶉が来てものの十日と経たぬ間に、四十雀が来る。この鳥
 は鶉と違つて、十羽も二十羽も群を組んで来る。山から里へ
 移る折などには、まるで時雨でもするやうに、細かい羽音が
 さつと空を掠めて聞える。そしてそこらの木立におりるな
 り、めまぐるしいほどすばしこく、雀の糞などを啄きまはし
 ながら、鼠色の背をそらし、柔みのある圓い胸を見せて、透通
 つた銀の鈴を振るやうな聲で、早口にしゃべり続ける。で、か
 うした大層な群の中には、きつとまだ羽の伸びきらない、灰
 色の産毛うぶげそのまゝの雛兒が交つてゐて、どうかすると高い
 枝に止り損ねて、もんどり打つて宙に返ることもあるが、そ
 こは又馴れたもので、いきなりひよいと下枝につかまつて、

もんどり打つ

ませた身振
ぎんく

ませた身振で、樹肌のひびきを啄いたりする。まるで山家育の
 すばしこいきさくな魂たまそのものを見るやうな氣持がする。



小雪がちらつく頃になると、鶉うらが来る。これは鶉と同じ
 やうに、大抵獨法師で、それもこつ
 みそりと附近を忍ぶやうにして來
 る。冬の初の午過、山近い田舎の小
 家で、爺は火燵に潜りこんで、こく
 りこくりと居眠をする。その側で

婆さんはせつせと絲車を繰つてゐる。煤けた障子に檐に吊
 した干菜の影が見すばらしく映つて、時をり、ちつぽけな小
 鳥の影がちらついたりする。どうかして、絲目が切れて、睡さ

うな鍾の音がはつたり止むと、こそくおんと掛菜かきをむしる音がするが、老人の耳にそんな音の聴取れようはずがない。婆さんは俯いたまゝ、また絲を紡つむぎにかゝる。さうかうする間に、鳥は舌打をするやうな聲を立てながら、ひよいくと小刻みに籬かきをつたつて、隣から隣へと、狭苦しい物蔭を出たりはいつたりして移つて行くのだ。それが鶉うしである。

鶉うしと後先になつて頬白が来る。冷たい雨のびしよびしよと降る中を、獨者の頬白が灰色の胸までぐしよ濡になつて、しよ寂然ぼりとそこらの木に止つてゐるのを見ると、私の國でこの鳥の啼聲を解いて、
一筆啓上つかまつる。

子供泣かすな、火の用心。

今度は便ついでに金十両、

やりたいたけれど、一文も御座なく候。

と言傳へるのを思ひ出して、しみぐなまと世渡のむづかしさと、旅心の寂しさを思はずにはゐられない。

後の雑木林にこんな小鳥が来る頃になると、野にはもうそろくうし鶉うしが來、鶉うしが來る。

——畿内行脚——

渡 鳥

北 原 白 秋

遠く鶉の
飛ぶ空見れば、
冬も末かよ
ちりぐとと飛とて行く。

渡り渡りの
みな風の鳥
いつか吹かれて
ちりぐとと飛とて行く。

J.W.E. Griffiths.
教育家兼宗教家
(西曆一八四三年生)
明治の初年日本
御雇教師であつた。

六 朝鮮雜觀 その一

『ミカドの帝國』を書いたアメリカ人グリフィスは、朝鮮を「仙人國」と呼んだ。この仙人國も今は我が大日本の新領土となつて、一千萬餘の仙人も皆我が新しい同胞である。仙人も段々俗人の仲間入をして、活動してもらはなければならなくなつたが、黒い冠を被り、白い衣を着て、悠然として市街を歩いてゐる朝鮮紳士の風采を望めば、いかにも仙人らしい様子が今でも見える。人ごとに長い煙管を携へてゐるのは、仙人にはふさはしからぬやうに思はれるが、この長い煙管そのものが、優長といふ感を一層強からしめるのである。

優長

殊勝



朝鮮貴人の俗風

貴賤上下悉く純白な着物を纏うて、見渡す限り眞白なのは、全世界中恐らくは朝鮮ばかりであらう。夏だからさうなのではなく、冬でもやはり同じである。これには一つの傳説があつて、昔或時代の王様が父王の死を悲しんで、始終白い服をつけて居られたので、人民が皆これに倣つたのだといふ。一應聞けば尤もらしい殊勝な話であるが、この傳説は無論作り事であらうと思ふ。どこの國でも、古い時代には眞白な着物が流行るが、その中に色々な染色や、縞しまや、飛白かすりの衣裳が行はれる。文化の他の方面が種々

萬事萬端
崇拜

に變化を受けたにも拘らず、純白な衣服が數千年の後までも行はれて居るのは、實に不思議といはねばならぬ。萬事萬端支那を崇拜した國として、この國俗を變へなかつたことも、考へれば面白いことである。

子供は折々桃色や、萌黄色や、藍色の着物を着て居る。それも全部同じ色で、日本の娘の子のやうに、美しい花紅葉の染模様ではない。婦人も間々紅色、萌黄色の衣を着けて居るが、模様や縞は少しもない。殊に婦人が「長衣」といつて、我が^被かつかぎのやうな物を着て、目ばかり出して歩いて居るのは、日本の古代の風俗そのまゝで、服制に多少の相違こそあれ、大體に於て古い繪卷物を見るやうな心地がする。低い屋根の下

繪卷物

で眞桑瓜などを食つて居る様子は、どことなく今昔物語をまのあたりに見るやうである。現在の生活に於て、朝鮮人が優長といふばかりではなく、朝鮮の歴史そのものが優長で、今でもやはり^{緩除}そろくくと、昔の歴史が流れて行くのではないかと思はれる。

衣冠を正しくす

衣冠を正しくすることは、慥



長衣を着た婦人

かに朝鮮人の一美風であるかと思ふ。どんな卑賤な人でも、めつたに肌を露すことにはない。これは寒い氣候の關係から、自然習慣となつた所以もあるかも知れぬが、とにかく素肌を人前には出さない。支那の勞

動者も身體の上部こそ露せ、腰から下は出さないが、朝鮮人で肌を脱いで居るのは、終に一人も見なかつた。

朝鮮人は雨具を用ひぬといふことは豫て聞いて居つた。今は田舎でも蝙蝠傘を手にして歩いて居る人を見受ける。それよりも不思議に感じたのは、雨降の時に、冠の上に小さな傘を載せて居ることである。竹の骨に油紙を貼つたものである。成程日本の傘はこれを大きくしたものだなと感服した。又頭に雲水の被るやうな深笠の大きいのを被つて歩いて居るのが往々ある。あれは何かと聞けば、喪中の人で、喪中は一年、二年、三年必ず常にあの笠を着けて居るといふ。いかさま舊い禮儀はやかましい所だ。朝鮮、支那、トルコ、皆それ

雲水

いかさま

(Turkey, 土耳其)

(Silk-hat, 絹帽)

ぞれの冠物を今にも保存して居る。日本人は古い物を保存して居るが、新しい物は又何でも用ひる。洋服に下駄も履き、紋附の羽織にシルクハットも被る。

七 朝鮮雜觀 その二

朝鮮人の物を運ぶのは、男は背で、女は頭である。男の背には例の支繫ちけいといふものを掛けて、一切の物をそれで運ぶ。八百屋が唐茄子や胡瓜を賣るのにも、背に負うて來るので、日本のやうに、天秤棒で両端に擔かぐことはない。すべてが山に柴刈に行く昔話の爺さん式である。女は洗濯物でも何でも頭に載せて行くので、これは京都の大原女式オハラメである。しかし

大原女のやうに、張板や、梯子などを擔いで歩くのは、見受けなかつた。

朝鮮には虎が居る。竹に虎といふから、竹も澤山ありさうに思はれるが、竹は少い。これは氣候のせいである。竹の簾や、扇子や、竹細工もいくらかあるが、概して日本のやうに竹を種々な工業には使つて居らぬ。南の新領土臺灣は竹の名所で、唐竹眞二つ割で天秤棒の代りにしたり、竹で船を造つたりして居るが、京城では竹竿一つ見附からぬ。洗濯物を干してあるのを見ると、大抵繩にかけ渡してある。又田舎などでは、丘



支繫をかけた男

今更のやうに

の上にも、竹のたがはない。竹のない所へ行くと、今更のやうに竹の効用の廣いのに驚かされる。

水道栓の側で水を酌んで居る朝鮮人を見ると、皆ブリキの石油の空函を用ひて居る。いかにも貧乏げにあはれに見える。瓢箪をたち割つたのが水を酌む杓子であるのは、古風で面白い。

朝鮮人の履物は、男も女も一種の靴であつて、日本のやうな下駄、足駄は見當らぬ。靴の下に足駄の齒のついたものがあるが、鼻緒を立てて、その鼻緒を足の指に挟んで歩くといふ藝當は、日本人より外には出来ぬのであらう。

むさくるし

朝鮮の家はいかにも低くて、むさくるしく見える。京城にはさすがに瓦葺の家も見えるが、田舎は殆ど藁屋ばかり。その藁の葺方が、日本の如く綺麗に端をそいでないので、たゞ藁を打ちかけたやうに、いかにも汚くて、遠くから見れば、豚小屋のやうにしか思はれぬ。寒さを恐れるため窓が少いから陰気で、日本の田舎家のやうにからりとして居らぬ。日本のは小さくても、汚くても、からりとおつ開いて居る。あれでは夏はさぞ暑からうといへば、日が透らぬから割合に涼しいとのこと。床は土で、その下が温突ヒタツで、冬は火を焚いて暖めるのである。元來朝鮮では、庶民には二階建、三階建を禁じたのである。それ故庶民の家は皆低い。地にはつて居るやうで

庶民

(一)朝鮮李王生父
李昪廟の尊稱。



宮 福 景

ある。又家を餘り立派にすれば、金持と認められて、すぐに課税せられるから、金持でもわざと外觀を汚くしてゐたやうな原因もあらう。併合後新築する朝鮮人の家には、段々と二階建の高いのも出来るさうである。

それに比べれば、王宮は比較にならぬほど規模も大きいし、立派である。就中さきの王宮景福宮は、大院君の造營(一)せられたもので、幾多の宮殿樓閣が相連つて、いかにも廣いものである。これを造る爲には、民の疾苦をも顧ず、人頭税までも課したといふ。いはゆる民の膏血

膏血を絞る

を絞しぼつて築いたので、この宮殿が即ち李朝に崇たつたのだといはれて居る。

この宮の正門興化門前の通などは、幅六十間、東京にも全くない。現王宮昌德宮も拜觀したが、これは近世の洋風に塗替へ、西洋の椅子、ソソーファなどがあつて、面目が改つて居る。しかし總じて建築には丹碧を塗附けてあるばかりで、材木の削方、仕上方は、日本のやうに立派でない。一體樹木の少い京城に、昌德宮の裏の秘苑だけは、さすがに老樹が生茂つて居る。しかし何等林泉の美としてはない。小さい溪流の石に題した句に、「飛流飛流三百尺。遙落疑九天來。」とあるのには驚いた。朝鮮人は怠惰で労働を嫌ふといふが、農業に精を出して

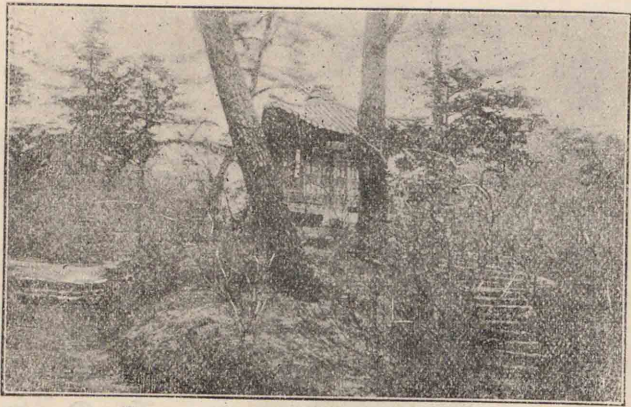
[Dofa.

丹碧を塗る

林泉の美

乃至は

(一)苛政猛ニ於ニ虎ニ。(一)禮記



昌 德 宮 秘 苑

働いて居るのを見ても、決して懶なまけるばかりの人間ではない。朝鮮の山を秃山にしたのも、朝鮮の家屋を豚小屋のやうにしたのも、乃至は長煙管をくはへて悠然として南山を見て居る白衣の民を作つたのも、皆古來の悪政の罪である。

(一)苛政は眞に虎よりも猛である。憫むべき我が一千萬の新同胞は、今や仙人の生活を次第に離れて、嬉々として我が聖天子の德澤とくさくに霑ぬひつゝあるのである。

八 八道の山

大町 桂月

(一) 八道の山よ、いざさらば、
踏荒したる日の本の
釜山の浦の秋ふけて、

我を知りにし太閤の
千里の外に戈執りて、



正 清 藤 加

年のなゝとせ戈執りて、
ますらはは今歸るなり。
空も時雨のゆふまぐれ、
波路遙かに帆を揚げて、
汝と今やわかるなり。
知遇の恩に身を捨てて、
四百餘州を我が駒の
蹄に蹴んといさみしも、
覺めてはかなき夢なれや。
世になき後は誰が爲に、
異境の山にいくさせん

(一) 朝鮮八道、江
ち京畿道、海
原道、全羅
忠清道、咸
鏡道、平安道。
(二) 朝鮮慶尚南道
の東南角、我
が國との交通
上最も大切な
所。

知遇

(三) 支那をいふ。

(四) 豊臣秀吉。

異境の山

(一) 石田三成、慶長
五年(一六二六
〇年)家康を
討たうとして
關原に戦ひ敗
れ、斬られた。
(二) 小西行長、秀
吉の臣、三成
に黨し、敗れ
て殺された。

耻を忍びてふるさとに、
主君の家のゆくすゑを、
あはれ太閤世を去りて、
石田、小西の小人ばら、
我が幼時より育まれ、
家を護りて死なん身の、
跡に見捨つるますらをの
三途の河や六道の
これを限りの見取に、
波音すごく雨荒れて、
八道の山よ、いざさらば、
花と散りにし日の本の

歸るも後に死なんため。
おもへば重き命なり。
よつぎの主は幼し。
かならず事を誤らん。
恵に浴みし豊臣の
永くは住まじ世の中に。
亡魂若しも知るあらば、
辻にしばらく我を待て。
今ひと度と見かへれば、
野山は霧におぼろなり。
國の譽とたゝかひて、
男子の骨を護れよや。

黄菊白菊

(一)名は健次郎。熊本の入。富猪一郎(蘇峰)の弟。小説。小品の作が多い。

兎 狩 (自修文)

德 富 蘆 花

得々として
得意な心持で。

曉闇
夜明け前の一層くらしい時。

収穫が済む。霜が降る。裏山の楓が染まる。すると兎狩の季節がそろそろ始まる。繕ひに遣つてあつた網も出来て来る。何日は兎狩といふ張札が出る。脚絆草鞋の用意に忙しくて、僕等は何も手につかない。愈、その日になつた。炊事番は夜半に起きて握飯をこしらへる。皆したくして塾の庭に勢揃する頃は、午前三時過でもあらう。月が白く冴えてゐる。三たび関の聲を揚げて、月影を踏んで出かける。大人組は網をかついて、高らかに詩を吟じて行く。僕等は黙つて、しかし心は得々としてついで行く。

ねむさうな鶏の聲のする村も過ぎ、けたましく犬の吠えかゝる村も過ぎ、野路を通り、谷川を越え、もう一里半も来たらう。月が落ちて、野は一面の曉闇前に行く者の姿もはつきりとは見えぬ。ふとすばらしい大きな眞黒なものが鼻の先に現れる。山だ。目的の山だ。まだ早い。皆焚火をしながら、天明を待つてゐる。

烈々
恍惚

晃々
きら／＼

勢子
鳥や獸を追出す役のもの。

僕は藁の上に寝ころんでゐると、背は寒い、顔や腹は焚火に暖つて、炎々と立昇る焔の間に、ちら／＼見えてゐた一同の赤い顔が次第に遠くなつて、つい、うつとりと一寝入したと思へば、起される。眼を摩つて起上ると、なるほど天明だ。東が白んで、曉の風が切るやうに面を吹く。焚火の跡だけ黒い圓をゑがいて、四邊は一面の霜だ。やがて勢揃して山にかゝる。進軍の號令がかゝる。関の聲が一時に揚る。二山も追ふ頃は、もう朝日が晃々と秋の空に昇つてゐる。

今懐うても愉快だ。秋が黄に、紅に、紫に、鳶に、あらゆる彩色の限りを盡した木を押分け、葉を打拂ひ、聲を揚げて登る心地、網近くまで追ひつめて、どうかと思つてゐる時、どこからか「とれた」といふ聲がして、我知らず棒を振つて勝鬨をあげる心地、網番をして、攻寄せる勢子の叫の間近になるのに、兎のうの字も駈けて來ず、あゝだめと落膽する時、突然がさ／＼と音をさせて、のぞく鼻先へ飛びこんで、二つ三つ網ながらにとんぼがへる兎を、樹蔭から飛びかゝつて押

へる心地、落葉かき分けて、谷川の水を口づけに飲んで、木の根、草の上
に脚投出して、握飯にかぶりつく心地、食つてしまつて、落葉の床褥
に仰向あむむけに寝て、碧玉へきぎよくよりも澄んだ空を眺めて、汗ばんだ顔を冷々し
た風に吹かせる心地、數へ立てると際限さいげんもない。

川名は忠教。直初世の忠
軍の前で鶴の將
吸物を賜はつ
た時、餘り少
か多し肉が少
登日多の、青
菜を獻上して
鶴を刺した。
と諷刺した。

秋の日の短さ、まだ三匹しか取れぬに、もう鴉が鳴きだした。遙か
に見える湖や川は金の如く夕日に閃いてゐる。獲物は蕙葛つたかつらで四脚
を縛つて、大人組が舁おいで疾くに還つた。僕等は紅葉の枝を折つて、
ぶら／＼後から還つて行く。山を下りて野に出ると、日は彼方の森
に沈んで、夕煙が村々に立昇ると思ふと、薄紫に煙る野末に大きな
月が顔を出す。その月が稍高く、稍小さくなつて、打連れて歩み行く
影の大分短くなる頃には、僕等はもう塾に歸り着いた。草鞋をぬい
で顔を洗つて、先生始め一同大胡坐おほまぐらで、てんでに兎汁を盛つて飯を
食ふ。大久保彦左の鶴の吸物ではないが、この兎の別名を大根、胡蘿
葡萄、牛蒡、燒豆腐、蒟蒻こじやくといふのではあるまいかと思ふほど正味は少

(一) 蘆花作の小説。
明治三十六年
東京民友社發
行。

信州小諸の附
近の景物を述
べてゐる。
平坦

い。しかしその味はひ、否それよりも食つてしまつて、着物も更へず
ぐつすり寝る時の心地は、何ともいへない。夢も見ない。身うごきも
しない。翌朝の九時頃までは死骸も同然だ。
——思出の記——

九 冬の來る頃

一 霜

島崎藤村

毎年十月の二十日といへば初霜を見る。雑木林や平坦な
耕地の多い武藏野へ來る冬、淺々とした感じの好い都會の
霜、さういふものを見慣れてゐる人に、この山の上の霜を見
せたい。桑畑へ三度か四度も霜が來る。桑の葉は忽ち縮み上
つて焼ける。實際猛烈な冬の威力を示すものはあの霜だ。そ
こへ行くと、雪の方はまだしも感じいぢが柔い。降積る雪は寧ろ

采

常陸國鬼怒川沿岸附近の情景

平和な感じを抱かせる。
十月末の或朝のことであつた。私は家の裏口へ出て、深い秋雨に色づいた柿の葉が、面白いやうに地にふるのを見た。肉の厚い柿の葉は、霜に焼ける損まれそこなはれたり、縮れたりはないが、朝日があつて来て霜のゆるむ頃には、重さに堪へないで、脆く落ちる。暫く私はそこに立つて、茫然と眺めてゐた。くらゐだ。そしてその朝は殊に烈しい霜の来たことを思つた。

二 木 枯

長 塚 節

烈しい西風が、目に見えぬ大きな塊をワリヤごうつと打附けては、又ごうつと打附けて、皆瘦せこけた落葉木の林を一日苛

—千曲川のスケッチ—

悲痛

京都の西北郊の風物をふが
(一)京都市上京區
(二)山城國葛野郡衣笠村の西、二百米の小丘

め通した。木の枝は時々ひゆうくと悲痛な響を立てて泣いた。短い冬の日はまだ落ちかけて、黄色な光を放射しつゝ、またゝいた。さうして西風は、どうかするとぼつたり止んでしまつたかと思ふほど静かになつた。泥をちぎつて投げたやうな雲が、不規則に林の上疑にじつとひつついてゐて、空はまだ騒がしいことを示してゐる。それでゐる時々は思ひ出したやうに、木の枝がざわくと鳴る。世間が俄に心細くなつた。

三 時 雨

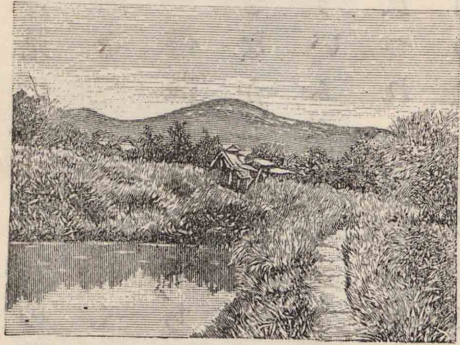
德 田 秋 聲

静かな北野の片ほとりであつた。衣笠山のなだらかな優しい姿が、縁端から青々と空を仕切つて望まれた。庭の外に

は大根などの畑があつた。菊のすがれたのがそこよろけてゐた。赤い唐辛が干からびてゐたりした。稍遠いところの色々な濃い竹藪の蔭に人家の軒が見えたり、雑木林の奥に鶏が餌を獵つてゐたりした。温い朝日が、それ等の唐辛や、菊や、畑の野菜や、林や、藪や、霜が融けてしつとり濡れたそれ等の土や枝葉の上に照りわたつてゐるかと思ふと、空がいつとなし曇つて來たりして、私は氣分までが曇るやうに思つた。北山時雨が軽い足取でぼちやくくと、板屋根に降りそゞいだと思ふと、すぐに霽れたりした。

私は時々一人で衣笠山の松林の中へ深くわけ入つたり、金閣の方までそゞろ歩きの興をおつたりした。四時頃にな

(一)京都市下京區。



ると甥が歸つて來た。私は一緒によく町へ夕飯を食へに出

たり、^(一)四條通あたりへ暮の景氣を見

に行つたりした。毎晩のやうに、二人

は遅く歸つて來た。そして歸つて來

ると行火にあたりながら、話の多い

甥から色々な話を聽かされた。郊外

の夜はしんくくと更けて、寒さが背

へ滲みとほつて來た。

「また時雨だね。」

と私はいつた。

——初冬の氣分——

(一)京都市愛宕区
約三千里北方
寺は山の鞍馬
にあり、天台
宗に属する山
火祭はその山
神社のある中
毎年十月二十
は日深更に行
れる

山氣

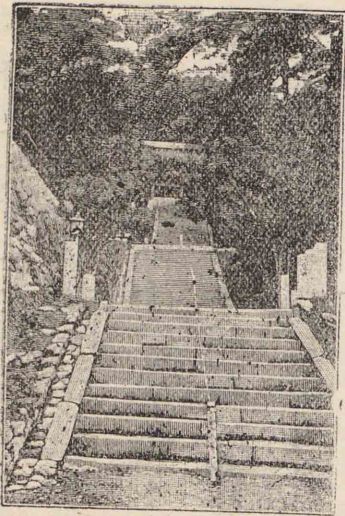
一〇 鞍馬の火祭

志賀直哉

十月廿日過、私は二三人の友たちと、鞍馬へ、火祭といふの
を見に行つた。日の暮京都を出て、北へ北へいくらか登りの
道を三里ほど行くと、遠く山の峽がほんのり明るく、その邊
一帯薄く烟の立ちこめてゐるのが眺められた。苔の香を嗅
ぎながら、冷えくとした山氣を浴びて行くと、この奥にさ
ういふ夜の祭があることが不思議に感ぜられた。子供づれ、
女づれの見物人が提燈をさげて行く。それを時々自動車が
前の森や山の根に強い光を射つけながら追ひぬいて行く。
山の方からは五位鷲が啼きながら飛んで来る。そして行く

ほどに、幽なくすぶり臭い匂がして來た。

町では家ごと軒前に、といつても通が狭いので道の真中
を、一列に焚火が並んでゐた。大きな木の根や、人の背丈ほど



鞍馬寺山門

ある木切で三方から圍ひ、そ
の中なかに燃えてゐるのが、何か
岩間の火を見るやうな一種
の感じを起させた。

焚火の町を出ぬけると、稍
廣い場所に出た。幅廣い石段があつて、その上に丹塗の大き
な門があつた。廣場の兩側は一杯の見物人で、その中を下帯
一つに肩だけちよつとしたものを着て、手甲、脚絆、草鞋がけ

に身を固めた向ふ鉢巻の若者たちが、柴を束ねた藤蔓で巻いた大きな松明たきまつを擔いで、「最澄祭禮」——これはほんたうではないが、ちよつとさう聽きなされる掛聲をしながら、兩足を踏張り、右へ左へよろけつゝ、上手に中心を取つて歩いてゐる。或者はよろける風をして、わざと群集の前へ火を突きつけたり、或者は家の軒下にそれを擔ぎこんだりした。火の燃方が弱くなり、自分の肩も苦しくなると、一抱ほどあるその松明を不意に肩から外はずし、どきりと勢よく地面へ投下す。同時に藤蔓がはちけて柴は開き、火は非常な勢で燃上る。若者は汗を拭き、息を入れてゐるが、今度は又別の肩にそれを擔ぐ。それも一人ではとても上げられず、傍わきの人から助けて

もらふのである。

この廣場を抜け、先の通へ入ると、そこにはもう焚火はななく、今の松明を擔いだ連中が、「最澄祭禮」と聞える掛聲をして、狭い所を行交ふ。子供は年相應な小さい松明を、わざと重さうによろけながら擔ぎ廻る。町全體が薄く烟り、氣持のいいぬくもりが感ぜられる。

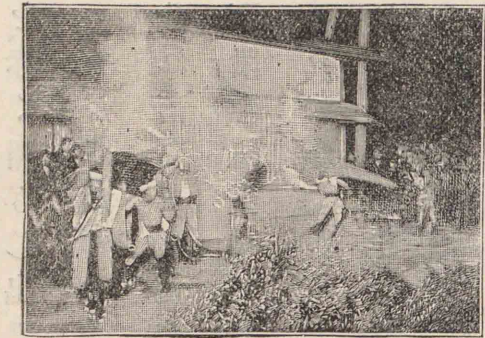
星の多い澄渡つた秋空の下で、かういふ火祭を見る心持は特別だつた。一筋の低い軒並の裏は、すぐ深い溪流になつてゐて、そして他方はまた高い山になつてゐるといふやうな所では、いくら賑はつてゐるといつても、その賑やかさの中には、山の夜の静けさが浸透つてゐた。これが都會のあの

騒がしい祭より知らぬ者には、大變よかつた。そして人々も一體に眞面目だつた。最澄祭禮。この掛聲の外には大聲を出す者もなく、酒に酔ひしれた者も見かけられなかつた。しかもそれはすべて男だけの祭である。

或所で裸體の男が軒下の小さな急流に坐つて、眼を閉ぢ、手を合はせ、長いこと何か口の中で唱へてゐた。清いつめたさうな水が、乳のあたりを波打ちながら流れてゐた。大きな定紋のついた、變に暗い提燈を持つた女の兒と、無地の麻帷子あしひらを展げて持つた女が軒下に立つて、その男のあがるのを待つてゐた。漸く唱言となごころを終へると男は立つて、流の端に揃へてあつた下駄を穿いた。帷子を持つた女が濡れた體に黙つ

てそれを着せかけた。男は提燈を待たず、下駄を曳きずつて、すぐ暗い土間の中へはいつて行つた。これはこれから山の

神輿を擔ぎに出る男だといふ。



祭 火

かういふ連中が間もなく廣場の石段下に大勢集つた。そこには二本の太い竹に高く注連繩しなはが張渡してあつて、その注連繩を松明の火で焼切つてからでなければ、誰もその石段を登ることが出来ないとのことだ。しかし繩は三間よりもつと高い所にあつて、松明を立てても、その火はなかく、そこまではとゞきさうにない。澤山の松明がその

下に集められる。その邊一帶、火事の時のやうに明るく、一緒に早くその焼切れるのを仰向いて望んでゐる群集の顔を、赤く照らし出してゐた。

やがて漸く火が移り、繩が火の粉を散らしながら二つに分れ落ちると、眞先に抜刀を振りかざした男が、非常な勢で石段を駈登つて行つた。すぐ群集はさけび聲をあげながらそれに續いた。しかし山の門にもう一つ、それは低く、ちやうど人の丈よりちよつと高くらるゝに第二の注連繩が張つてある。先に立つた抜刀の男は、それを振りかざしたまゝ、駈抜ける。注連繩は自然に切られる。そして群集は坂路を奥の院までそのまゝ、駈登るのである。

「どうだい、もう歸らうか。」と私は友を顧ていつた。

「お旅でやるお神樂を見て行かうよ。」

神樂といふのは、四五人で擔ぐやうな大きな松明をいくつか、神樂の囃子に合はせて、神輿のまはりを擔ぎ廻るのである。

「大概もうわかつたぢやないか。」

「何時だ。二時半か。」時計を見ながら友だちがいつた。

「これで京都へ歸ると、ちやうど夜が明けるかも知れませんが、んよ。」ともう一人の友だちがいつた。

焚火の町では、來る時岩間の火のやうに見えてゐたのが、今は盛に燃えてゐた。町を出ると急に山らしい冷氣が感ぜ

られた。私たちは時々振返つて、明るい山の峽を見た。道は往
きより近く思はれ、下りで樂でもあつたが、やはり皆は段々
疲れて、無口になつた。

「睡くてかなはん。」と一人がいつた。

「僕が腕を組んで行つて上げるから、眠りながら行き給へ。」
もう一人がさういつて、二人は腕を組んで歩いた。

京都へ入る頃は、實際友だちがいつたやうに、叡山の後か
らしらぐと明けて來た。

——暗夜行路——

一一 入 營

川路 柳 虹

一郎は兵隊だ、けふから——

近衛歩兵第一聯隊の兵隊だ。

折自正しい黒紋付に

びか／＼した仙臺平の袴、

行儀正しく山高帽をいたゞき、

八ツ頭のやうな頭を、

冴えかへる夜明のプラットホームの

小さな待合室のかげにさし出す。

うす暗い電燈と、乏しい火鉢の粉炭と、

むらがる村の衆に交つて、一郎は黙つて不動の姿勢

をとる。

——まあ達者で行かつしやれ。

——二年はすぐぢや。

——苟も國家の干城ぢや、

立派になつて歸らつしやれ。
 だが、一郎にはそれ等の聲より、
 あのうちの畑の菜つ葉が、
 あの熟れる柿の樹が、⁽¹⁾チャボが、小鳥が、
 更にやせこけた母親の顔が
 なつかしく、なつかしく思ひ出された。

汽車がくる。

一郎は押されて箱に乗る。

萬歳の聲が小さな驛に一ぱいになる。

兄や、叔父や、たくさんの村の衆に囲まれて、

一郎は小さな首を窓のかげにもたせてゐた。

黎明がやさしく霜の下りた畑を

ビロードのやうなうす紅で撫で、

緑の野菜車が往還を行くのを見ながら、

汽車は都へ、都へと急いで走る。

——村落風景——

一二 無線電信の發明

渡邊 忠 吾

寒い北風がびゆうくと吹荒む冬の或日のこと、いづれ
 も二十五六の血氣盛の三人の青年が、^(一)カナダの東極端聖口
 ーレンス灣の口を扼する^(三)ニューフォンドランド島の東海
 で、烈風に乗じて細い針金を附けた^(二)凧を飛ばしてゐたが風
 が餘り強過ぎるので、何度となく針金が切れて、凧は海の彼
 方へ吹飛ばされてしまつた。この針金の一端は、何か知らん

(1)Canada.
 (加奈太)。ア
 メリカ合衆國
 の北イギリ
 スの領地。
 (2)St. Lawrence.
 (3)New-
 foundland.

傍觀

が或不思議な器械に繋いであるのだ。變な事をする物好きな若者どもだといふ風に、彼等のする事を傍觀してゐた燈臺の老信號手は、少時姑たつてから向ふに見える燈臺の方へ歸つてしまつた。

三人の青年は老信號手が歸つた後も、熱心に風を揚げて見たが、風が強過ぎた爲に、その日はとう／＼目的を達することが出來ずに、暫時厄介になつて居る燈臺へ引揚げた。その翌日もやはり器械と針金と風を持出して、前の日にやつた通り、風を揚げては何事かを試験し始めた。この日は前の日とは違つて、風もそれほど強くはなかつたので、三人は一心不亂にこの仕事を繼續した。ところが間もなく、器械の側

の卓子に寄掛つて、器械から連續してある電話の受話器を耳にしてゐた瘦形の凛々しい青年は、思はず「おいおい、來たぞ來たぞ。確かに成功した。とん、とん、とんと三つ響いて來た

ぞ。」と、連の二人の助手を顧て微笑した。



Guglielmo Marconi
イタリアの電
氣學者。西曆
一八七四年生。

Corwall,
イングランド
西南部の州。

マ
コ
ニ
あつた。二人の連は案の如くい
ギリスの本土から連れて來た

助手であつたのである。今を去ること二十年前、千九百一
十二月十二日の午前十一時三十分、ちやうど二千哩を距
てるイングランド、コーンウォールの海岸から、大西洋を横

瀟漫す

[Eber,

] Heinrich

Hertz,

(西曆一八五
七年) 一八九
四年)

[Bologna,

腐心す

斷して波及して來た無線電信の電波が、或装置を行つた件
の凧に感じ、地上の器械に傳はつて、そして首尾よくマルコ
ニの耳に響いて來たのである。彼はこの時二十七歳であつ
た。マルコニがかくの如く宇宙に瀟漫するエーテルを導體
として、ドイツの物理學者ヘルツが發見した電波をば空中
を通じて電信の用をさせるまでには、實に七年の辛酸を嘗
めたのである。

彼はイタリーのボロニヤの生で、幸にも富裕でそして賢
明な父を持つた爲に、容易にボロニヤ大學に入學したが、彼
はここで貪るやうに電波に關する知識を吸収し、そして大
學生時代にすでに無線電信の發明に腐心したのである。

彼の創作した器械で、とにかく二哩の距離を隔てて通信
が出来るやうになつた時、彼はこの器械を持つて母の生ま
れた英國に渡つた。それはやつと彼が二十二になつたばか
りの時であつた。それから幾多の苦心を積んで、今世紀第一
年の十二月、大西洋横斷の電信が出来るやうになつたので
ある。その後無線電信電話が漸次に發展して、今では大陸と
大陸の通信はいふまでもなく、軍艦、汽船、飛行機に至るまで、
いづれも無線電信の器械を備へつけるやうになつた。人類
はこの發明によつてどれほど恩澤を蒙つて居るであらう
か。一青年の力も偉大であるといはねばならぬ。

林檎の落つる音

輕蔑

一三 機械と道具と人間の手

我々は往々畜類を輕蔑して四つ足といふ。なるほど我々が二本の脚で直立が出来、これがため自由な手を有するに至つたことは、我々人類の大いなる誇である。

經濟的發達

この自由な手を持つやうになつて、我々は始めて經濟的發達の根本動力である諸道具を造り出すやうになつたのである。手があればこそ、始めて今日の人間になつたといへる。そこで我々は手で人を代表させ、相手、手代、騎手、名手、選手などといふ。又眼に見、耳に聞き、口で話しても、なほ見手、聞手、話手などといふ。

鹿島だち

かやうに手は人間にとつて至つて大切なものであるが、その手の延長せられたのが、畢竟道具である。その道具の更に延長せられたのが、今日の機械である。機械は發動機と、傳動機と、道具の三つの部分から出来てゐるもので、即ち道具の上に、更にその道具を動かす爲の仕組を加へたのである。されば道具は單に人力の補助を爲すに過ぎぬが、機械はこれと異なり、謂はば自動的の道具で、晝夜の別なく獨りかちかちと動く時計などは、最も小規模な機械の一例である。すでに機械は自動的である。さればこそ、一たびこれを貨物の生産に應用すると、我等は別に勞役に服しなくても、容易に物資の豊富な供給を得るのである。今日西洋諸國の經

刻苦精勵

濟が驚くべき發達をした根本原因は、全くこの機械の應用が、各方面に普及した爲である。彼等の富は斷じて勤儉貯蓄の結果のみではない。刻苦精勵したのは、人ではなくて、機械である。試にこれを新聞紙の印刷に就いて考へて見るに、若しこれを木版に彫つて手刷にしたら、勞力も非常で、費用も亦夥しいものであらう。機械の力に依ればこそ、何十萬部を瞬く間に刷上げ、一日十頁、一箇月三百頁といふ大部のものを、僅か一圓くらゐな代價で賣ることが出来るのである。今より二十年前、米國で調査したところに依ると、三萬六千頁の新聞紙の印刷及び折込に要する勞動時間は、全く機械を使用すると、僅かに一時間と八分を要するに過ぎないとい

ふが、これは二十年前の事、種々改良の行はれた今日では、その差は更に著しいであらう。

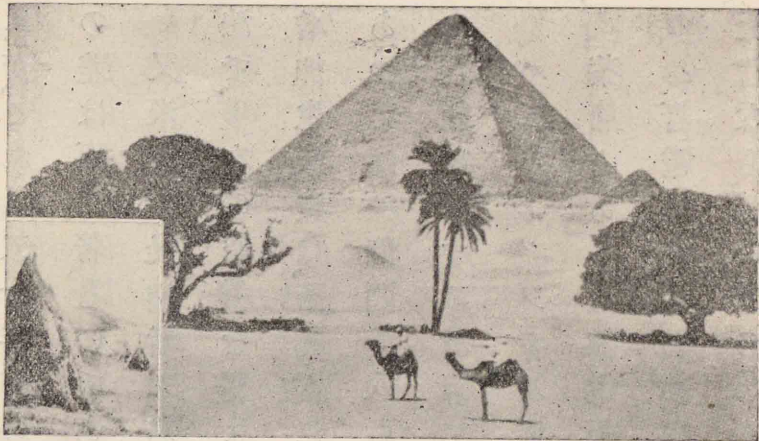
又米國の農業者が、若し機械を用ひず、五十年前の舊い方法で、現在の收穫を得ようとするならば、これが爲に生ずる増加生産費は、玉蜀黍とうもろこしにあつては十億四千六百萬圓、小麥にあつては一億四千八百萬圓、燕麥あやむぎにあつては一億六千萬圓の巨額に達する計算であるといふ。

パリのエッフェル塔(一)の高さは無慮九百八十呎、塔上には喫茶店もあり、無線電信の設備まであつて、海に向ふのカナダへ打電することが出来るといふ。しかし單に高いといふだけなら、遠い昔のエジプト人も、高さ四百八十呎のピラミ

Eiffel.
無慮

Egypt.
(埃及)
Pyramid

Australia.
(澳大利亞)

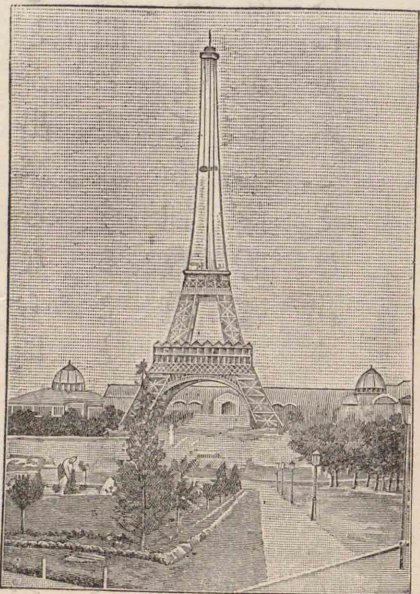


ピラミッドと蟻の塔

ピラミッドを造つて居る。かの白蟻でさへ、アフリカやオーストラリアに居るものは、約二丈に達する塔を作る。人間から見ると二丈は驚くに足らぬが、白蟻自身からいへば、彼等の身長約千倍に及ぶ高さである。たとひ簡単な道具だけでも、否、道具は全くなくとも、必ずしも高い塔が作られぬといふわけではない。たゞ問題は時間と労力に比較にならない差異があるとい

ふことである。

エジプト最大のピラミッドを作る爲には、約十萬の人間が、殆ど三十年に亘つて使役せられたのであるが、その二倍以上の高さを有するエッフェル塔は、博覽會の餘興として、僅か三年間に落成せられたものである。昔は馬上の急使でも、津輕から薩摩まで二十二三日乃至三十日を要したが、今は坐ながらエッフェル塔上から、海上遙かに何千哩を距てた遠いカナダへ通信することが出来る。畢竟機械の特長は、



エッフェル塔

勞せずして功を収める點に在るのである。

思ふに道具を發明する能力の有無で、人間と動物の生活に根本の隔りが生じたやうに、機械を發明し、これを利用し得る文明國民と、これの出來ない未開國民の間には、同じやうな隔りが生じてゐるのである。若し人間を以て道具を製造する動物と定義することが出来るならば、いはゆる文明人とは、機械を使用する人間と定義することが出来る。そして蟻や蜂がいかにも勤儉貯蓄しても、到底道具を有する人間に及ばぬ如く、未開人も亦いかに勤儉貯蓄しても、到底機械を使用しつゝある文明人に及ぶことは出來ないのである。

—河上肇の文による—

三人の時計 (百修文)

甲、乙、丙の三人が或所へ行かうと思つて、その時間を相談しました。

「一時半の汽車にしよう。」と甲がいひました。

「よろしい。しかし今は何時だらう。」と乙がいひました。

「一時十分前だ。」と自分の時計を出して見て、丙がいひました。

「君の時計は合つてゐるのか。」と乙が聞きました。

「あゝ、僕の時計は正しい。ドンに合はせたのだから。」と丙が答へました。

「いつ合はせたのだ。」と甲が聞きました。

「三日前だ。」と丙が答へました。

「それでも君の時計が後れる質なら、君の時計はもう正しくはないだらう。」と乙がいひました。

「そんな事はない。僕は僕の時計を信ずる。」

丙は又きつぱりかう答へたあとで、甲に聞きました。

「君の時計は何時だ。」

「一時十分過だ。」

「随分進んでゐるね。」と丙が笑ひました。

「あゝ、僕の時計はあてにならない。」と甲がいひました。

「それでも君は君の時計をいつドンに合はせたのだ。」と乙が甲に聞きました。

「きのふだ。」と甲が答へました。

「きのふ。そんなら二三日前にドンに合はせた丙の時計よりはあてになるかも知れないぢやないか。」

「うん。しかし僕には僕の時計は信ぜられない。なんだか違つてゐさうな氣がする。」と甲が俯いて答へました。

「そんなあてにならない時計を持つてゐても、仕方がないぢやな

いか。」と丙が罵つていひました。

「君のが合つてゐるなら、君の時計に合はせよう。」甲はかういつて、自分の時計を丙の時計に合はせました。

「君の時計は何時だ。」丙は又乙に聞きました。

「かつきり一時だ。」

「いつドンに合はせたのだ。」

「をとゝひだ。」と答へました。

「やはり進む質だね。」

「いや、僕の時計はどちらかといふと、少し後れる質なのだ。だから多分今は一時五分過くらゐだらう。」と乙がいひました。

「そんなことがあるものか。それは違つてゐるよ。」と丙が笑つていひました。

「うん、少しは違つてゐるかも知れない。しかし大した違はないはずだ。ここから停車場までば、どのくらゐかゝるだらう。」

「二十分あれば十分だ。だからまだゆつくりしてゐていい。」と丙がいひました。

「しかし今が一時五分過とすれば、あと二十分しかないのだから、僕は一足先に出かけるよ。停車場でいづれ會はう。」

乙はかういつて、出て行きました。

「氣の早い奴だ。」

丙と甲はかういつて笑ひました。

しかしそれから暫くたつて、甲と丙が停車場へ行つた時、乙は二人にいひました。

「汽車はもう出てしまつた。僕は間に合つたのだが、君たちを待つてゐたのだ。」

甲と乙は驚いて顔を見合はせました。

「それでは僕の時計は違つてゐたのかな。」と丙が顔を赤くしていひました。

「さうだ。君の時計は二十分後れてゐたのだ。僕の時計は十分後れてゐた。甲の時計が合つてゐたのだ。」

「さうかなあ。」と甲がぼんやりしていひました。

「して見ると、君が一番利口だつたわけだね。」

「さうだ。自分を知つてゐるものが一番利口だ。時計は信ずる爲に在るものだ。信じなければ、それは何の役にも立ちはしない。間違つた時計を持つてゐて、それを信ずるのはもとより悪いが、又どんな正しい時計を持つてゐても、それを信じなければ、間違つた時計を持つてゐると同じことだ。又何も持たないのと同じことだ。間違つた時計を信ずるものも、正しい時計を信じないものも、ともに汽車に乗ることが出来ない。それは両方ともばかであるからだ。自分を知つて信ずべきものを信ずるものだけが、汽車に乗ることが出来るのだ。」

乙はかういひました。

——長興善郎の文による——

一四 三都氣質

鶴見祐輔

フランス人は勤勉な國民である。イギリス人も勤勉な國民である。しかしその勤勉さには相違があるやうに思はれる。勤勉それ自身に本來の差があるわけではないけれども、英佛人の勤勉性の差は、單に外形上、形式上の相違だけには止らぬやうである。それは両國民の國民性の相違から生ずるのではあるまいか。然らばその國民性はいかに相違してゐるだらうか。こんな事を考へながら、私は一人でよくパリの公園を歩いてゐた。そしてこれにアメリカを今一つ加へて、よく三國の國民性を比較して見た。

[New York.
(紐育)]

躍動す

三國の特色は、その國の大都會に於て著しく眼に着く。それは、都會はその國の國民性を最も鮮に映し出してゐるからである。多くの人は、ニューヨークは餘りに歐洲化してゐるといふ。しかしニューヨークに一日ゐると、我々はアメリカの大空氣が全身に躍動するのを意識せずにはゐられない。ニューヨークはやはり米國である。そしてロンドンは英國であり、パリは佛國である。恰も東京が日本であるやうに、話は又英佛人の勤勉性に還る。朝早くパリの街を歩くと、石の舗道の上には、もう綺麗に打水がしてある。凱旋門のあたりの廣場には、花賣の露臺がいくつともなく立並んで、新聞賣の小舎とともに、心地よい朝の活動を象徴してゐる。黒

い質素な着物を着た女たちが、耳に快いフランス語で笑ひ興じながら、忙しげに花に水を注いだりなどしてゐる。

ロンドンの下町に晝頃行くと、狭い側道の上に、商館や銀行などの書記かと思える若者が、帽子も冠らずに、何百人となく忙しげに往來してゐる。私はこの群の中を縫ふやうにして歩きながら、遠いアフリカや印度の貿易を机の上でやつてゐるこの人々の日常生活を考へた。そしてフランス人とは種類の違ふこの人々の勤勉さをも考へた。こんな時には、いつもフランスの或小説家の言葉が腦裡に閃いた、佛國人は蜜蜂のやうに勤勉に、英國人は蟻のやうに精勵である。と。パリとロンドンの生活を見てゐるうちに、この言葉の深

精根

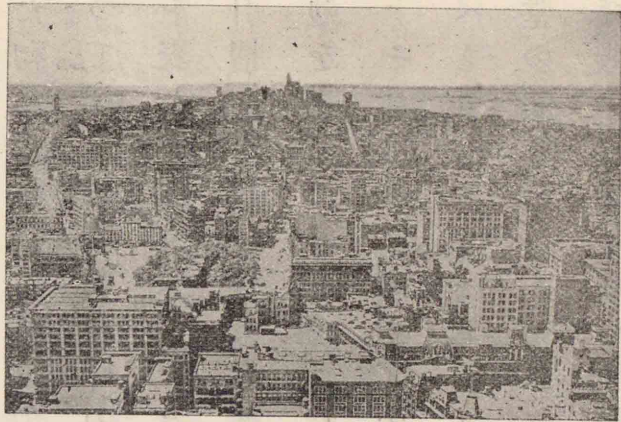
い意味が、日一日と自分の頭腦に深く沁みていつた。晴渡つた初夏の日盛に、寸刻の休もなく、花から花へ蜜を求めて翔つて行く可憐な蜜蜂の勤勉が、いかにもよく佛國人の心持を表して居り、來るべき冬の支度の爲、營々として重い餌を引摺つて行く健氣な蟻の精根が、いかにもよく英國人の勤勉を表してゐるやうに思はれた。

それならば、米國人のあのいらくした忙しさは、何に喩へられようかと考へて見た。私の頭の中に、ふと淺草の觀音堂の鳩が浮かんで來た。いつ行つて見ても、大勢の人込の中で、幾十百羽の鳩が我劣らじと押合ひ厭合ひ、地上の豆を拾つてゐる。物音に脅されて飛立たうと、半分氣を外に配りな

がら、それでも眼前の豆粒は一つでも餘計に食べようと、眼の色を變へていつまでも餌を拾つてゐる。米國人の勤勉は正にこの鳩のやうに餘裕がないと、私には考へられた。

朝の出勤時間頃にニューヨークの地下鐵道に乗る人々は、これがこの世ながらの阿鼻叫喚ではないかと思はれるやうな雜沓を目撃する。或日、私は汽車の切符を買ひに市内營業所に行つた。大勢の客が群集してゐた。係の

阿鼻叫喚



ニユーヨーク市の市中

若い米國人が、私の行先と乗るべき列車を聴取り、やがて右手の袖をちよつと捲り上げて、鉛筆持つその手を、切符の紙の上で左右に五六回激しく振つた。何をするのかと呆氣にとられて見てゐると、忽ちくわつと手を紙の上に落して、するすると切符の文字を眼の廻るやうな早さで書終へた。ただ今手を振つたのは、結局手に運轉をつける爲だつた。私は噴出すやうなをかしさを感じた。なにもさう手に運轉をつけないでも、大して時間に相違もなく字が書けようし、又運轉をつける時間だけ無益のやうな氣がした。

その翌年、私は英國の商務院の鐵道局に、賃金の一覽表をもらひに行つた。すると係の若い英國紳士が、たしかこの机

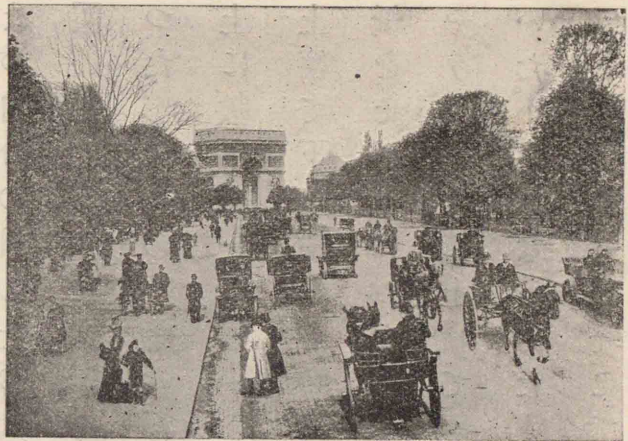
堆積

の中に一枚だけ統計表を入れて置いたはずだ。」といつて、自分の机の引出を開けた。私は見るともなくその中をのぞきこんで見て、驚いた。まあ、なんといふ多数の書類だらう。累々と種々な紙片が堆積せられてある。それを件の若い紳士は、手を突つこんで、がさ／＼と搔廻して、「ここにはない。」といつて、次の引出、又その次の引出を開け、そして最後の引出の底から、やつと見つけ出した。これは差上げるわけにいかないから、ここで見て下さい。」といふから、一度見ただけではとても覚えられませんね。」と答へると、ちよつと當惑して、「それは私が寫してあげませう。」といつて、それを別な白紙に筆寫し始めた。ニューヨークならば、傍にゐる若い女のタイピス

當惑

Typist.

トに命じて、一分間に寫させるところだが、件の若い紳士は、まづ自分の机の上の大きな吸取紙の上に原本の統計表を置いて、その上に白紙を當てて書出した。私はちよつと面食つた形で、この異様な淨書法を見てゐた。すると、彼は白紙の上に數字を一行書いた。そして今度はその白紙を左手で持上げて、下の原本をのぞいて、次の行の數字を諳記して、又白紙をその上にべたりと置いて、諳記しただけ書いて、又前のやうに紙を持上げて原本をのぞいて、又その上に重ねて書いた。不思議な遣方だと思つてゐると、やがて書終へた。インキが乾いてゐない。そこで、今度はその紙と原本と二枚持上げて、下敷になつてゐる吸取紙の上に裏向に置いて、丁寧にい



(ニュー・ヨーク・ド・アホ) リバ

ンキを拭取つて、さて私にその淨書したのをくれた。ニュー
 ヨークから着いたばかりの私は、
 全く呆氣にとられて、ここを出て
 行つた。そして幾回となく鉛筆持
 つ手を振つて運轉をつけて、猛烈
 な勢で切符の文字を書いた米國
 人と較べて考へて見た。
 その春、バリの郵便局に書留小
 包を出しに行つた。慣れない私は、
 誤つて受取人欄へ自分の住所姓
 名、差出人の欄へ先方の住所姓名を書いた。これを局の小窓

から差出す時、私はふと氣づいて、「おや」といふと、局員の佛國
 人がつとペンを取つて、受取人といふ字を抹消して差出人
 と書き、差出人といふ字を抹消して受取人と書いた。なるほ
 どこれで送票は完成したわけである。しかもそれがほんの
 一瞬間だつた。私は全く感服してしまつた。そしてニューヨ
 ークの切符賣と、ロンドンの役人と、バリの郵便局員とを頭
 の中で列べて見た。鳩と蟻と蜜蜂と。

— 三都物語 —

一五 ロンドンだより

氣付
 拜啓。昨日大使館へ行つて、同館氣付で御差出しの御手紙
 を受取りました。その後は御變りもなく御勉學の由、何より

も結構に存じます。私もここに着以來もはや二箇月、諸所の見物も一通りは済ませました。着いた當座は東も西もわからず、地下を縦横十文字に走つて居る地下電車も不案内で困りましたが、今は自然に覺えて、もうまごつくこともありません。新しく日本から着く人を案内したりなどして、あつばれロンドン通になつて居ります。たゞ今の住所は市の西の方で、有名なハイドパークといふ大公園の附近の下宿屋です。宿泊人は十人ほどで、イギリス人の外、フランス人、ベルギー人、スヰス人なども居つて、食事の時は皆一室に集ります。日本人は外に一名も居らぬので、少し寂しく思ひますが、語學の勉強の爲には、この方が却つてよからうと存じて居

- (London. (倫敦). イギリスの首府。世界第二の大都會。)
- (Hyde Park. (白耳義).)
- (Belgium. (白耳義).)
- (Swiss. (瑞西).)

俱樂部

ります。日本大使館は四五町隔つて居ります。在住日本人の組織して居る日本人會といふ俱樂部があります。これも遠くはありません。目下在住の同胞は大使館領事館の人々が十二三人、陸海軍の將校を合はせて二十四五人、私どものやうな留學生が十人、その他は三井、三菱、郵船會社、正金銀行などの人々を始め、商工業に従事して居る人で、全體では三百人も居りませう。土曜の晩など日本人會へ行けば、なか／＼賑やかなことです。そこでは日本食も出來ますから、折々行つて、故國の新聞を讀み、故國の噂をするのを何よりの樂みに致して居ります。

ニューヨークやシカゴは賑やかな場所も極つて居りま

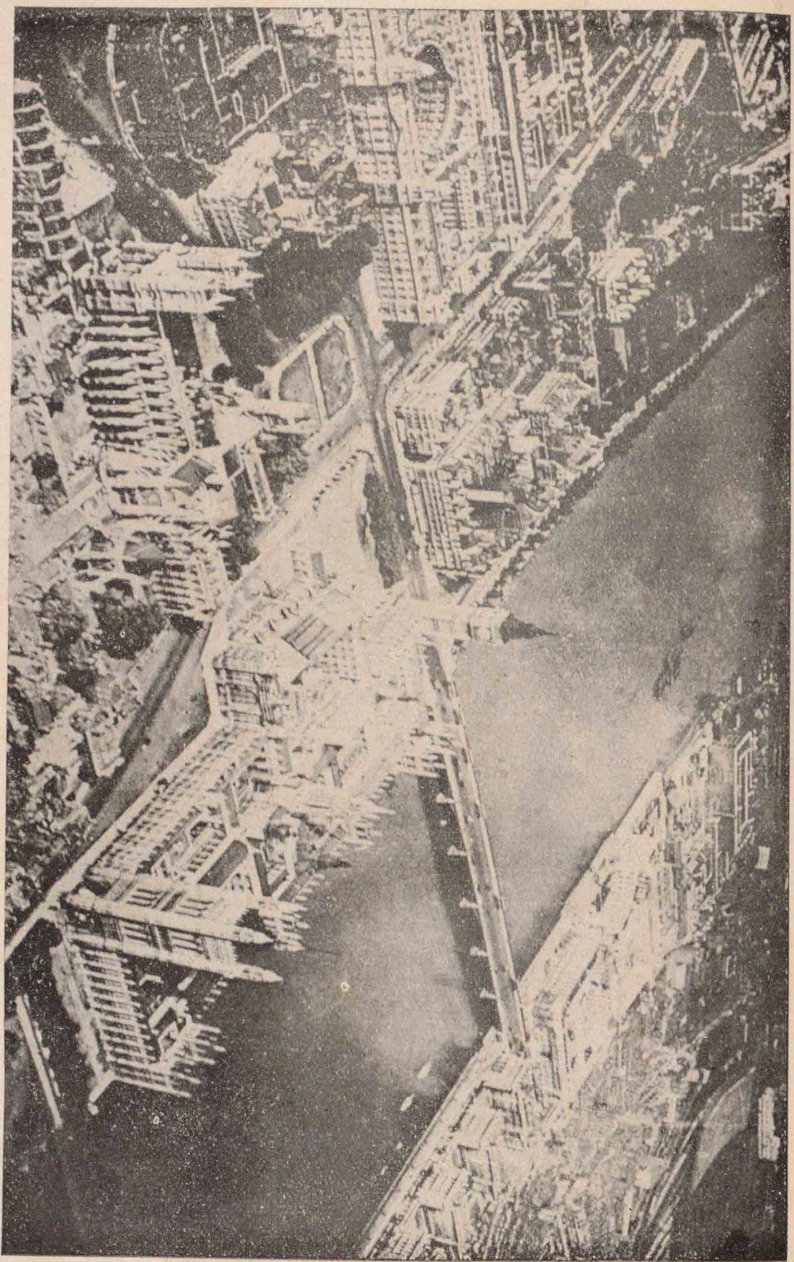
- (Chicago. (北アメリカ合衆國の都會).)

すが、ロンドンにはさすがに昔からの大都で、どこへ行つても賑やかです。アメリカからこちらへ渡つて見ると、やはり古い文明國の偉大な點がわかります。古い建築物や、古い記念碑や、皆英國の歴史、歐洲の歴史に關係をもつて居るので、見るものとして面白い感想を浮かばせないのはありません。^(一)ウエストミンスター、^(二)セント・ポールの大寺院など、どうしてもアメリカでは見られないものです。^(三)ロンドン塔へも行つて見ました。中世時代の武器の陳列が心を惹いたよりも、某王、某侯といふ名高い人々が露と消えた斷首場の跡を見て、思はずぞつとしました。日本國の歴史ほど美しい歴史はないと、つくづく感じました。

(一) Westminster.

(二) Saint Paul.

(三) ロンドン市中
テムズス河の
邊に在る古城



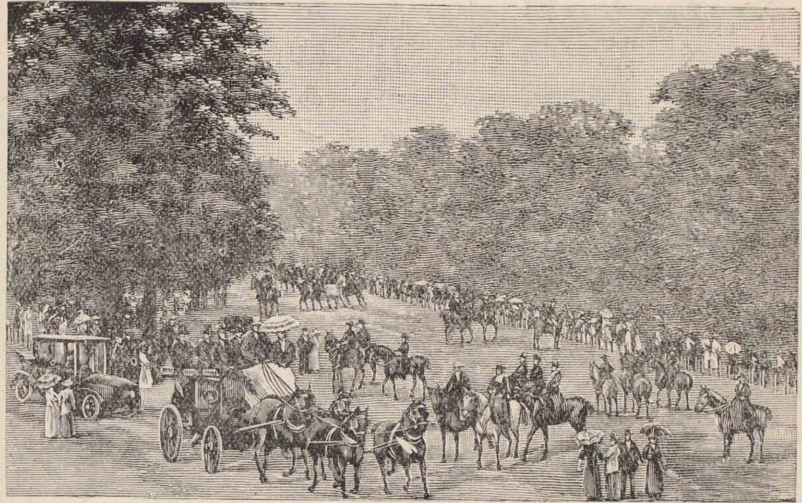
(るた見りよ機行飛) シンドロ

大英博物館の陳列品を見ては、英國の發達の歴史、それに
連れて各時代の偉人を思ひ出します。その一部圖書館には、
毎日幾百といふ人が、大きな讀書室に集つて、靜かにそれぞ
れの研究を續けて居ります。繪畫館の繪の上には、一々硝子
がはめてありますので、見にくくて、近眼の私は少々弱りま
した。パリのルーブル^(一)では、そんな事はありませんでした。こ
れは氣候か何かの關係があるのでせう。南ケンシントンの^(二)
博物館、ここには理科、博物の標本などが澤山ありますが、最
も感心したのは機械の標本で、一つボタンを推せば、電力で
動くやうになつて居りますから、どんな精巧な新奇な機械
でも、一見してその構造、作用がわかるのです。日本にもかう

]Louvre.

]South
Kensington.

めげず



ク　ー　バ　・　ド　イ　ハ

いふ博物館が欲しいなど、同行の友人と語り合つたことです。
ロンドンの冬は日が短くて、霧が多くて、誠に鬱陶しい御座います。それでもハイドパークあたりでは、氷滑が盛んです。この寒さにもめげず、男も女も戸外の運動に熱心なのは感心です。四月にもなれば、寒気もだん／＼緩んで、公

園の青葉もそろ／＼芽を出すさうで、五月が日本の春の氣候ださうです。その時分になると、色々な戶外運動が一層盛になるのです。いづれその中に又々お便を致しませう。どうぞ皆様へよろしく。

一六 大 阪

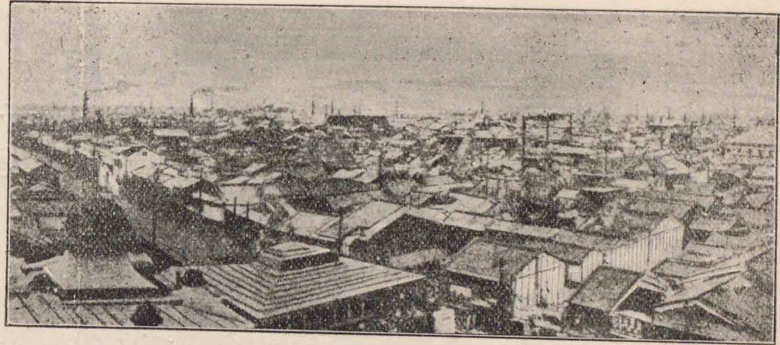
なには津に咲くやこの花冬ごもり

今を春べと咲くやこの花

古は浪速と呼び、今大阪と稱して、人口百二十五萬に上る本邦第二の大都會。海内無双の商業地として、市街の繁盛、商況の活潑、首府東京にも優るかと思はれる。旅客一たび大阪

商況

布置



(一のそ) 景全の市阪大

驛におりれば、家屋の構造、市街の區劃、道路の布置、市民の風俗、又全く一種の商業的趣味を帯びてゐるのを發見するであらう。地勢は概して平坦であるが、東部一帯は稍隆起して、低い丘陵性の臺地をなしてゐる。市域東西二里十九町、南北二里二十四町、面積三方里餘、東、西、南、北の四區九百十三町に分れてゐる。古來安治川以北を天満、蜷川以北を北の新地といひ、中央部を船場、島之内と稱し、南部は難波新地といひ、西部

金融市場

(一)第十六代、
いはずもが
な
(二)天正十一年。



(二のそ) 景全の市阪大

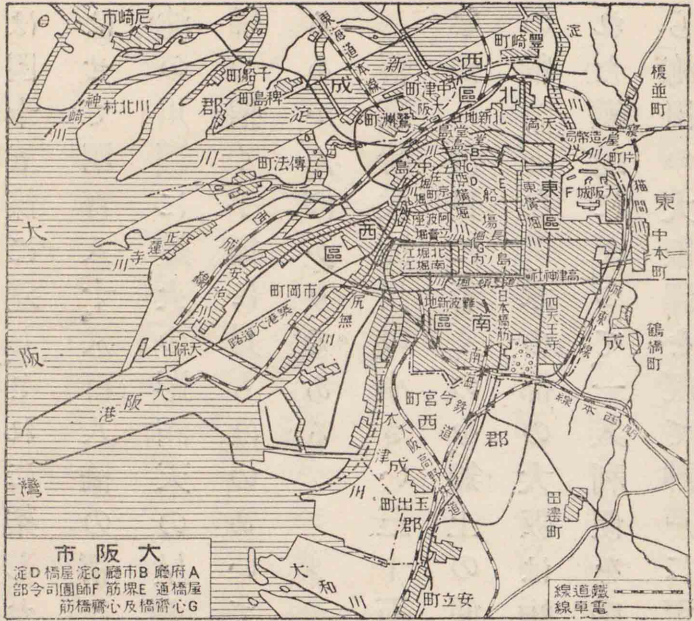
には堀江、立賣堀、阿波座があり、その最も繁華なのは船場、島之内で、淀屋橋通、心齋橋通が特に繁昌を極めてゐる。船場には銀行、問屋が多く、市の金融市場をなし、堂島、中之島には官衙が多く、京町堀附近には幕府時代に於ける大阪風の繁華がなほ残つてゐる。仁徳天皇の高津宮の古はいはずもがな、豊臣秀吉がここに城を築いて天下に號令し、又天下の豪商を集めてから頓に繁華になり、豊臣氏の亡んだ後も、なほ全國

波及す

舟楫の便

商業の中心地となり、各藩の物産交換の大市場として、この地の物價の一高一低は、直ちに全國に波及したのである。王政維新の後も、關西の經濟界、商業界は全く本市によつて左右せられ、その海外貿易額も、大正十年には輸出二億九千二百萬圓、輸入一億一千九百萬圓に上り、輸出は全國總額の二割三分、輸入は七分を占めてゐる。中にも工業の盛なことは我が邦第一で、工業會社、諸工場が多く、煙突から吐く煤煙は全市をこめて、「煙の都」と稱せられてゐる。

市内には大小の河川が四通八達して、舟楫の便を備へ、西には大阪灣を控へて、海陸運輸交通の便がよろしい。その「煙の都」たるは即ち「水の都」たるが爲で、「水の都」たるはやがて又



して、その他木津川あり、尻無川あり、東横堀川あり、西横堀川

「橋の都」たる所以である。見よ、山城から流れ來つた淀川は、京橋を過ぎて寢屋川と合し、巨流いよ、西方に落ちて、ここに中之島を作り、餘勢二流に岐れて堂島川となり、土佐堀川となり、ともに西南に奔り、末また合して安治川となつてゐる。これを市内の大河と

夕陽西に春づく

往くさ來さ

故老

あり、長堀川あり、道頓堀川あり、東西南北に流れる川々の數は四十五條に達し、これに架した大阪名物の橋梁は、大小合はせて四百八十、八百八橋の稱に反かぬ。夕陽西に春づけば、淀の川瀬に燈火の影滿天の星と落ちて、風にゆられる柳の絲の招く手振に月もほのめいて、往くさ來さの涼舟、目もくるめかんばかりである。

舊幕時代淀川の小さい三十石舟に靜かな夢を載せて、寢ながら伏見に着くのを、無上の便利と考へたのも、今は故老の物語となり、水の都の大阪は蜘蛛の巢のやうに敷設せられた鐵道によつて、一入利便を感ずることとなつた。京都から梅田の大阪驛を経て神戸に至る東海道線をはじめとし

線路交叉す

て、關西線があり、片町線があり、福知山線があり、城東線があり、西成線があり、その他南海鐵道があり、大阪高野鐵道があり、線路交叉複雑して、旅客をして行手に惑ふの感あらしめるのである。

「鐵道旅行案内」による

一七 伊能忠敬の晩學

幸田露伴

(一)上總國武射郡小堤村の人。舊姓神保。取郡佐原町伊能氏の養嗣子となつた。政四年(一八七一年)歿。年七十七。
自ら抑ふ
平々凡々
才氣
一舉手一投
足の勞

忠敬年十八にして伊能氏の養嗣子となり、五十歳にして家をその子景敬に譲るまで、自ら抑へて平々凡々の人となり、一意専心、たゞ伊能家の衰へたるを興し、おのが任務を最も圓滿に、最もうるはしく果さんことを期しむたりき。およそ才氣あるものの常として、己が欲せざる事には、一

情を屈し氣
を抑ふ
徳量

舉手一投足の勞をも惜しみ、單に己が欲する事にのみ身を委ねんとするは、免れ難き習なり。たとひ己が欲せざる事なりとも、その爲さざるべからざる事なる以上は、甘んじて我が情を屈し、我が氣を抑へて、我が爲すべき事をなすは、その人當に才氣あるのみならず、又實に徳量ある人なりといふべし。

奇才を抱く

世に才氣ある人は多し。才氣ありて徳量ある人は少し。年少にして才のみ勝れたるは、譬へば鋭き刃の肉薄きが如し。物を截ることはよくすべし、折るゝ虞は免るべからず。されば世に、奇才を抱きながら、成功を見ずして中途に事を廢する例は、數へも盡し難し。忠敬が算數、曆術の學を嗜み、且これ

市井の凡人
に伍す

をよくすべき資を抱きながら、自ら甘んじて市井の凡人に伍し、伊能氏を嗣ぎたる上は、伊能氏を榮えしむべし。といふ

丹誠



を唯一の望として、三十餘年一日の如く、ひたすら家業に丹誠した能るが如きは、實にその徳量の大きい忠なるを見るべきなり。

敬かくて伊能家は興りぬ。景敬は家を継ぎぬ。一家の事また憂ふべきものなし。忠敬が伊能家に對する義務は、ここに始めて圓滿に果されたりといふべし。

忠敬は始めて閑散の身となりぬ。忠敬の身はこれより忠

老境に入る
爲すある人

敬の自由に用ふることを得べし。この時は忠敬はすでに五十歳。常人にありては、最早老境に入るべき時なり。されど心の壯なる人には、何歳の時も前途有望なる青年の春なり。爲すある人には、いかなる場合も、我が力を試みるべき所たり。忠敬は常人が世の務を辭し、花月の遊を事とすべき時に當りて、始めて學に就き、而して後漸く世に出でんとせり。後爲すあらんと欲するもの、苟も眞に爲すあらんと欲せば、青年空しく過ぎて、身の將に老いんとするを歎ずることなかられ。

飄然
寓

さるほどに、忠敬はその郷里佐原を出でて、飄然として江戸に到り、寓を深川に定めて一學生となれり。年こそ老いた

笈を負ふ

れ、實に一學生となれるなり。尋常一様の笈を負ひて郷關を出で、都門に遊びて師を尋ね、學に就くところの書生と異なるところは、たゞその若きと老いたるとの差のみ。かくして忠敬は身をおのが好める學に委ねたるが、おのが満足し信仰すべき師を得ることは容易ならざりき。

折から幕府には、^(一)曆法改正の舉ありて、これがため特に大阪より高橋作左衛門といふ者を召されたり。作左衛門、東岡と號す、算數曆象の學に精し。忠敬急ぎ東岡を訪ひ、その學の深きに服して、直ちに師弟の契を結びぬ。時に忠敬は五十歳にして、東岡は三十二歳なりき。普通の人情にては、己より年若き人に會ひては、たとひ己が學業などその人に及ばずと

(一)寛政九年に成稱する
(二)大阪の人。名は至時。文化元年(二四六四年)歿。年四十一。

笑柄

も、なほ強ひて自ら高ぶり、敢へて頭を下げざるが習なれども、徳量ある忠敬は、いかでか眞に敬ふべき學識ある人に向かひて拜伏するを厭ふべき。喜びてその門下生となれり。然れども同門の學生等は、師たる東岡の若くして、弟子たる忠敬の老いたるをば、屢、笑柄としたりといふ。

晩學

晩學の難きは、實にいつれの世にありても、かゝる事實の存するが故なり。ここを以て、非凡の士にあらざれば、大抵自ら耻ぢて、師に就き學を修むる勇氣を失ひ、終に空しく志を抱いて、墓穴に入るに至るなり。本來よりいへば、老いて學ぶは、たま／＼その志の淺からざるを顯すのみ。又何の不可あらん。況や又何の耻づべきところかあらん。思ふに、區々た

群小
蛙鳴蟬噪

決潰す

蘊奥を究む

る群小の嘲笑も、忠敬に於ては、たゞ蛙鳴蟬噪を聞くが如くなりしなるべきのみ。かゝれば忠敬と同門生との優劣勝敗は、比較するまでもなく明らかなることなり。忠敬の學術は、さながら堤防の決潰して洪水の押寄するが如き勢を以て歩を進め、遂にその學の蘊奥を究めて、東岡門下に肩を比すべき者なきに至れり。

頽齡用ふる
に堪へず

かくて忠敬が始めて幕府より測量の命を蒙り、その修得したる學術を實地に運用する機に際したるは、實にその齡五十五歳の時なりき。五十五歳といへば、人は頽齡用ふるに堪へずとする年齢なり。されど忠敬は氣力旺盛、さながら壯年の人の如く、測量の命下るに會ひて、喜色滿面に溢れ、即日

勇往直前

にも出發せんとする勢ありきといふ。忠敬が事に當りて勇
往直前、險阻に屈せず、風濤に辟易せず、遂にその志すところ
を完成したりしは、一にこの元氣勃々として燃ゆるが如き
熱心を、胸裏に藏めたるによれるなり。誰か日本人を早熟早
老の人種なりといふ。これ豈我に伊能忠敬あるを知らざる
者にあらずや。

—「露伴叢書」による—

(一)儒者。名は原。世に近江聖人と稱する。慶安元年(一七〇八年)歿。年四十一。
(二)高島郡。今青柳村に屬する。
(三)明の大儒。
その風を望む

(一)中江藤樹先生は俗稱を與右衛門といひ、江州大溝在なる
小川村の百姓の家に生まれき。學王陽明の流を汲みて、その
德行一世に秀で、遠近皆その風を望まざるはなかりきとい

一八 藤樹先生

橘 南 谿

(一)京都の學者。元祿四年(一六九三年)歿。年七十三。

(二)高島郡。

(三)滋賀郡。

ふ。

(一)熊澤蕃山は先生の門人なり。この人の先生に従ひし始を
尋ぬるに、面白き話あり。



中江藤樹

その頃加賀の飛脚、金子二百兩を預り持たて京へ上るに、江州河原市(二)より馬を雇ひて、榎木(三)の宿に至りて泊りぬ。馬方河原市に歸りて、馬を洗はんと鞍を解きつれば、財布一つ出でたり。取上げて見れば、金二百兩あり。大いに驚き、急ぎ榎木に行きて、かの飛脚の宿れる家に到り、對面して委しく尋ね問ふに、その人の忘れし物に相違なければ、これを返しけり。飛脚は死し

蘇る

たる者の蘇りたる心地して、行李より別の金子十五両を取
出して馬方に與へ、若しこの二百兩なくば、我が生命を失ふ
のみならず、親兄弟までも重き罪に行はれん。さればこの恩
なかく、言葉のいひ盡すべきにあらず。まづ當座の御禮ま
でにこれを贈り奉る。」と、涙を流して喜ぶ。馬方大いに驚ける
面持にて、「そなたの金をそなたに取納め給ふに、何の禮いふ
ことかあるべき。」とて、手にだに取らず。

面持

こしらへい
ふ

色々こしらへいへども、更に受けずして歸らんとする
故、止むことを得ず十兩となし、五兩となし、三兩となし、段々
減じて、終には金二歩となし、せめてこればかりは。」と理を盡
し、詞を盡していふに、「この金を受くるほどならば、二百兩を

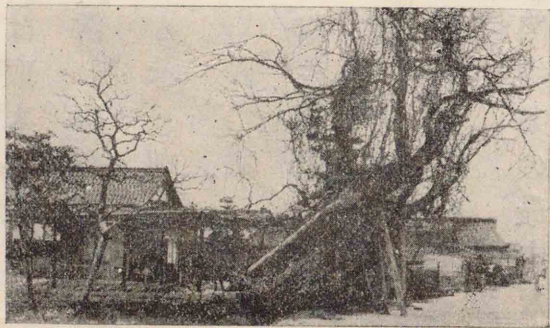
理を盡し詞
を盡す

も留め置くべし。それだにかく返し申すからには、いさゝか
にても謝禮を受くるは我が心にあら
ねど、餘りに餘儀なく宣へば、さらば鳥
目二百文を賜へ。これは今夜休むべき
ところを、ここまで追掛け來れる賃錢
なり。我が取るべき錢なれば申し請く
べし。」といひて、二百文を懷にし、歸らんとす。

氏素性

飛脚は感に堪へかねて、その氏素性

を尋ね問ふに、名あるものにあらず。又何一つ知れるものにも
あらず。たゞ我が里の近くに、小川村といふ所あり。そこに



藤江中の樹舊の宅遺の愛の藤

無理非道

與右衛門といふ人おはして、夜ごとに講釋といふ事をせらる。某もをりふし往きて聽き申したるに、親には孝を盡すべし、主人は大切にすべきものなり、人の物は取らぬものなり、無理非道は行ふべからずなどいふこと、常に語り給ふにより、けふの金子も我が物にあらざれば、取るべき理なしと心得しまでのことなり。」と言捨てて、歸りぬ。

辛き命

飛脚はそれより京へ上りて、いつもの宿に到り、さてもこの度は辛き命生延びて、各方にも對面することを得たりとて、ありし次第を委しく語りけり。

蕃山をりふし田舎よりのぼりゐて、學問修業の最中なりしが、この物語を聞きて、その人こそ眞の儒といふものなれ

隨從

とて、翌日すぐに江州に行きて、小川村に藤樹先生を尋ねて、隨從を願ひたるに、「人に教へ申すほどの學徳なし。」とて、更に許し給はず。蕃山ひたすらに願ひて、二日が間先生の門に佇



熊澤蕃山

みて歸らず。先生の老母これを氣の毒がり、ともかくも内に入れ申せよ。」とあるに、辭み難くて内に入れ、遂に師弟の契約をせられけりとぞ。

その後、先生を備前侯の招き給へる時、その身は病身なりとて固く辭し、門人熊澤といふものあり、お役にも立つべきものなり。」とて、蕃山を出されけり。いづれも格別のことなり。

(一)岡山の城主池田光政

格別のこと

「東遊記」による

最も偉大な豪傑 (自修文)

第一段 (金曜日、學校の教場)

校長「今度の月曜日の宿題を上げます。『最も偉大な豪傑』といふ題です。これまでに讀んだ書物の中で、一番えらいと思ふ豪傑の例をお舉げなさい。」 學生吉田「友だちに聞いてもようございますか。それとも自分で考へ出すのですか。」 校長「自分で考へ出すといふことにしたい。」 學生逸見「本を見てもいいんでせう。」 校長「本は宜しい。課題を調べるに参考になるやうな本は何でも見て宜しい。ちやうど鈴が鳴つた。課業をしまひます。」

(校長退出)

學生倉木「天下第一の豪傑は誰だらう。僕には當てられない。」 學生入江「君、當てるのぢやない。考へるのだよ。」 學生城「そんなにむづかしくはない。僕はもうわかつた。」 吉田「先生の言はれたことが僕等の考へて

ある通りなら、僕にもわかつてゐるんだが、先生が題をお出しになつた時、妙な笑顔をなさつたから、僕等が考へてゐるのよりも、もつと深い意味があるらしい。」 倉木「とにかく、歸つてゆつくり考へよう。」

(二回退出)

第二段 (月曜日の朝、學校の門前)

逸見「入江君、君豪傑を考へ出したか。」 入江「考へ出したとも。少し考へてすぐわかつた。」 逸見「さうか、みんなどうしたらう。さあ急いで行かないと時間に後れる。」

(吉田、倉木、城来る)

入江「やあ、皆來た。諸君お早う。」 城「入江君、豪傑はわかつたか。」 入江「胸のポケットを叩いて見せ。」 「大丈夫、ちやんとここにしまつてある。」 倉木「そのポケットに入る豪傑なら、鉛筆のやうな小さなのだらう。」 入江「それでも君のより大きいかも知れないよ。」 吉田「さうだ、入江君の言最も理あり。袋が大きいからといつて、中味がよいとは限らない。」

(校長來る)

逸見「やあ、丸井校長だ。」 一同「先生、お早うございます。校長、豪傑を選んで來ましたか。」 一同「はい、皆調べて來ました。」

(一同退出)

第三段 (教場、生徒着席)

校長「さあ、どういふのが眞の豪傑か、一人々々に尋ねて、選んだ豪傑の名を聞くことにします。城、一番にお答へなさい。」 城「私は豪傑といふものは、非常な伎倆ぎりやうをもつてゐて、何人をも恐れず、あらゆる敵に打勝つものだと思ひます。」 校長「成程尤もだ。だがまだ何かおとしてはゐませんか。」 城「先生、この上にどういふ資格しやくかくがあるか、考へられませんか。」 校長「よろしい、外の人に聞いて見よう。しかしお前の豪傑の標本は誰ですか。」 城「豊臣秀吉です。」 校長「えらい人を選びましたな。しかし私は、秀吉には豪傑たる者の具へて欲しいと思ふ。或資格が缺けてゐるやうに思ふ。今度は倉木、お前の豪傑の定義

伎倆
はたらき
で。

をいつて御覽。」 倉木「先生、私は豪傑といふものは、強ち偉い大將に限らぬと思ひます。寛仁大度で、よく人の過を恕し、それと同時に志が堅固で物に驚かず、己の生命よりも社會同胞を愛する人でなくてはならぬと思ひます。私は中江藤樹先生を選びました。」

校長「大層面白い。倉木の定義はよほど面白い。又選んだ人物も立派だ。ところで逸見は。」 逸見「私は源頼朝を選んで見ました。しかし頼朝は平家を亡して父の仇を報い、六十餘州の人民を、驕る平家の暴政から救ひ出したが、これと同時に、利己心の爲に奔走したやうに思はれるから、或は眞の豪傑とはいはれぬかも知れません。尤も倉木君の説を聴くまでは、それに氣が付きませんでした。」 校長「逸見のそこに氣の附いたのは至極宜しい。頼朝の兵を擧げた動機は、國家生民の爲、平家の虐政を除く爲であつたとは思はれぬ。その志を得て後の行を見ても、博愛などいふ高尚な事を理想としてゐたらしくもない。……入江、お前の豪傑は。」 入江「先生、私も豊太閤を選

生民
人民

昌平
國のさかえ
世をたひらな
こと

びましたが、今皆さんの説を聞いて、間違がわかりましたから、徳川家康にします。家康は智もあり、勇もあり、寛仁大度で、慈悲深く、天下を太平に治め、民を安穩幸福にすることに努めて、遂に三百年間無事昌平の代を作りました。」

校長、宜しい。入江、お前が秀吉に代へて家康を選んだのは賛成だ。

さあ吉田、お前の意見は。」 吉田、先

生、私は一所懸命古代の豪傑を調べて見ましたが、

満足を得ません

でした。まあ孔子のやうな人が眞の豪傑に近いかと思ひます。孔子は最も深く善惡の別を辨へ、これによつて天下億兆の民を、人の人たる正道に導かうとしましたが、亂世で用ひられなかつたから、遂



江藤樹筆孔子

孔子を六載孔子を
以前既無孔子
孔子以後更無孔子
文載孔子

に弟子を集め、書を著して、その道を百世に傳へました。かういふのでなければ、眞の豪傑とはいはれぬと思ひます。」 校長、吉田の考が一番大きい。まづ今日の優等の答案です。これについては倉木、入江だ。成るべく廣く社會人類の幸福を増進せしめた人が一番らしいのです。しかしさういふ立派な事をするには、いろ／＼な困難があつて、並大抵では出来ぬが、就中一番の困難は、自分のわがまゝに克つといふ事である。孔子も『己に克つは仁の本』といつて居られる。或場合にはわがまゝ、どころか、大切な我が命を棄てても、社會國家の爲に盡さねばならぬこともある。『殺身成仁』といひ、『獻身犠牲』といふのはこれです。

『己に克つものは眞の豪傑なり。』

といふ西洋の格言を覚えて戴きたい。他人に勝つよりも、まづ自分のわがまゝ私慾に克たなければ、眞の豪傑とはいはれない。」

(一同退出)

一九 新年

曆の改るとともに、人は一歳づつ年をとるのであるが、實際は、その度ごとに生まれ變つて若くなるのである。新しい年を迎へるには新しい希望を以てするので、今年こそはと奮發するから、事業に對しての勇氣も生ずるのである。過去を顧れば、人の行爲には缺點もあり、失策もある。それをいつまでもくよくくしてゐては、前途の發展は望まれぬ。過去は水に流して、行手に光明を求めるのが、處世の良法である。そしてその好機、即ち年の改る日である。

水に流す
行手に光明
を求む

我が國には、昔から大祓といふ祭式によつて、過去のあら

復活

ゆる罪を一掃し、汚れた心を打棄てて復活するといふ風習がある。これは六月と十二月との二度行はれたもので、即ち我が國民は、一年に二回づつ心身ともに新になつて、復活し來つたのである。この大祓の式は今でも行はれて居る。就中十二月は、年も新になる前であるから、この復活の儀式が盛大に、且嚴格に行はれるのである。

そこで、我等は新年を迎へる用意としては、身分相應に、出來るだけ一切の物を新にし、清くして、形の上にもこの復活の義をあらはすことに務めるのである。春秋に富む壯者は勿論、還暦に入り、古稀に達する老人でも、その生まれ變る心持には異なるところがない。

春秋に富む
還暦
古稀

簡樸

正月の儀式は、太古の質素簡樸の風を傳へて、今日に至つたものである。注連繩しづななはや、樺葉かづらばや、白木の三方しやうぼうや、土器つちぎや、昔ながらの祖先以來の風を繼承して、毎年繰返してゆくところに妙味がある。即ち年々生まれ變ると同時に、年々昔を憶ひ出してゆくのである。祖先から傳はつた掛物を懸けたり、古い道具を出したりして、遠い昔を憶ひ出すのである。

宗家

我が國民の宗家と仰がれ給ふ皇室に於ては、我等が一家に於て家の祖先を祀ると同様に、新年には四方拜を行はせられ、又元始祭を擧げさせられ、内外臣僚を召させられて拜謁を許され、御宴を賜ひなどせられる。これを思へば、余等は今の世ながら、直ちに太古建國の昔を憶ひ起さずには居ら

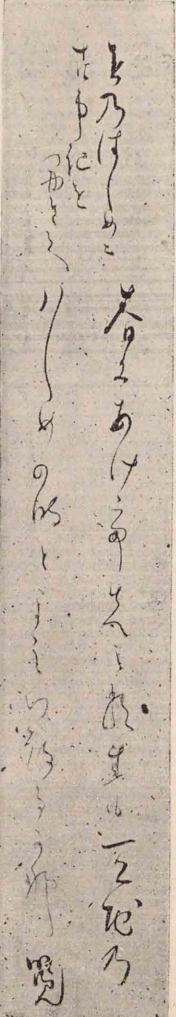
(一) 越前國福井の歌人。明治元年癸酉。

(二) 古事記のこと。

れぬ。余は橘曙覽の

春にあけてまづ見る書も天地の

はじめの時と讀みいづるかな



橘曙覽筆蹟

といふ歌を、早くから深く感心してゐた。これかの

(三) 元朝や神代の事もおもはるゝ

と同一の思想であつて、日本人の心には、元旦と神代とは離れぬものである。

(三) 足利時代の連歌師荒木田守武の句。

二〇 お日様の船出

與謝野晶子

鹿島だち

お日様、お日様、

若いお日様。

けふはあなたの鹿島だち。

正月元日瑠璃色の

海になびいた霞幕、

その紫をすと分けて、

金のお船に玉のかい、

東の空に帆を揚げる。

めでたや、めでたや、

おめでたや。

お日様、お日様、

若いお日様。

けふはあなたの鹿島だち。

金のお船に積みあまる

熱と光は世をあたゝめ、

眞紅の帆から洩る風は、

長閑な春を地に満たし、

そして行手は花ざかり。

めでたや、めでたや、

おめでたや。

— 日本童謡選集 —

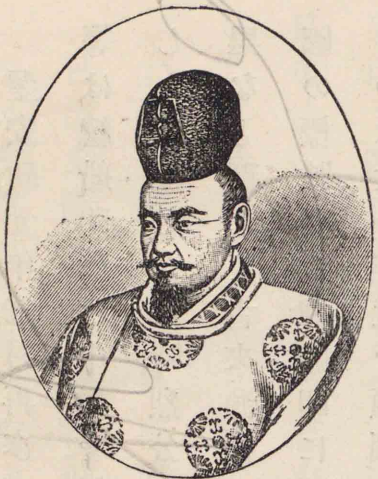
二一 日章旗と水戸烈公 木宮 泰彦

凡そ國旗は國家の標號であるから、その國の歴史を語り、その國の國體を表し、その國の國民精神の理想を示すものでなくてはならぬ。世界いつれの國と雖も、國旗の制のない國はないが、我が日章旗のやうに鮮明で純一、端正で雄大なものはない。

しかし我が日章旗が國旗として制定せられるまでには、幾多の曲折があつたもので、それに就いても思ひ出されるのは、水戸烈公の功績である。

嘉永六年六月米艦四隻が浦賀に來つて交通を求めた時、

曲折
德川齊昭
戸の藩主
延元二年
二〇年
五十一
年 歿、年
水 萬 五



德川齊昭

我が國の上下驚愕して爲すところを知らず、幕府は水戸の烈公を起して事に與らしめた。その年の九月幕府は烈公の議を用ひ、始めて大船製造の禁を解いた。一度大船製造の禁を解いたのであるから、各藩に於ても、大きな船が漸次建造せられ、中には蒸氣船すら造るものもあつた。随つて我が國に於ても、外國船と紛れない爲に、國旗を制定して船印とする必要が起つた。當時これを國旗とはいはず、總船印と稱してゐた。そこで幕府は有司に命を下し、意見を奉らしめたところ、評

有司

定衆は旭日を以て總船印となすべしと論じ、大目付、目付等は中黒を用ふべしと主張し、衆議紛々として、何等決するところがなくて終つた。

翌安政元年五月再び國旗制定の論が起つて、大目付、目付等は總船印には中黒を用ひ、幕府の旗には日の丸を用ふべしと主張した。當時烈公はこれに反對して、中黒は新田の中黒など稱して、古來源氏の旗印であるのに、これを大日本帝國の標號たる總船印に用ひ、日の丸を以て幕府の旗印とするのは、大小輕重を顛倒したもので、その當を得ぬ。苟も國意を代表して威を萬國に輝かす國旗には、日の丸でなくてはならぬ。幕府は中黒を以て印とすべしと論じて、その旨を幕

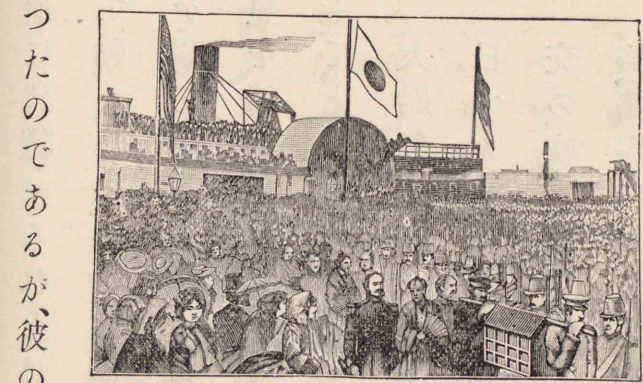
府に建議せられた。けれども大目付、目付等は前議を固執して動かない。そこで烈公は七月一日再び建議案を奉り、中黒を以て國旗とするの不可を論じ、日章旗の圖まで添へて意見を述べられたので、幕府も遂に烈公の議を用ひ、衆議を排して、七月十一日次の如き發令があつた。

大船製造につきては、異國船に不紛様、日本總船印は白地の丸幟、相用候様、被仰出候。且又公儀御船の儀は、白紺布交の吹貫、帆中柱に相建て、帆の儀は白地中黒に被仰出候條、諸家に於ても白地は不相用、遠方にても見分り候帆印、銘々勝手次第相用可申候。尤も帆印、その家の船印にても、かねて書出し置様可被致候。右大船の儀、平常廻米外運送

に相用候儀、勝手次第に候へども、出來の上は、乗組人數並びに海路乗筋運送方等、猶取調可被相伺候。右之通可被相

觸候。

かくの如く烈公の努力によつて、我が國旗は光榮ある日章旗と定まつたのである。



日章旗と米國人

後數年を経て安政七年、外國奉行新見正興等が北米合衆國に使し、條約の批准交換を行つた。この時始めて堂々日章旗を翻して彼の國に行つたのであるが、彼の國人はその壯烈な意匠を見て、驚嘆し

(一) 豊前守と稱す
批准交換

たといふことである。

晦冥

國旗の制定はかくの如くであるが、その紋章の由つて來つたところは、甚だ遼遠である。畏くも皇祖の御名は天照大神、又は大日靈貴と申し奉り、大神一たび天の岩戸に隠れさせ給へば、天地爲に晦冥になつたといふのは、天日とその徳を等しくし給へることを物語るのである。随つて天皇の御位を天つ日嗣と申し、皇子を日嗣の御子、日並皇子など申し奉つてゐる。聖德太子が小野妹子を隋に遣はし給ふや、その國書にいはく、「日出づる處の天子、書を日没する處の天子に致す」と。又いはく、「東天皇敬みて西皇帝に白す」と。げにや我が國はアジアの東方に位し、日出づるところの國である。旭日

皓潔

の輝々たる光は熱烈活動のさまを示し、その真紅の色は皓潔至誠の情を示してゐる。我が日本の標號とするに、日章を措いて他に何があらう。

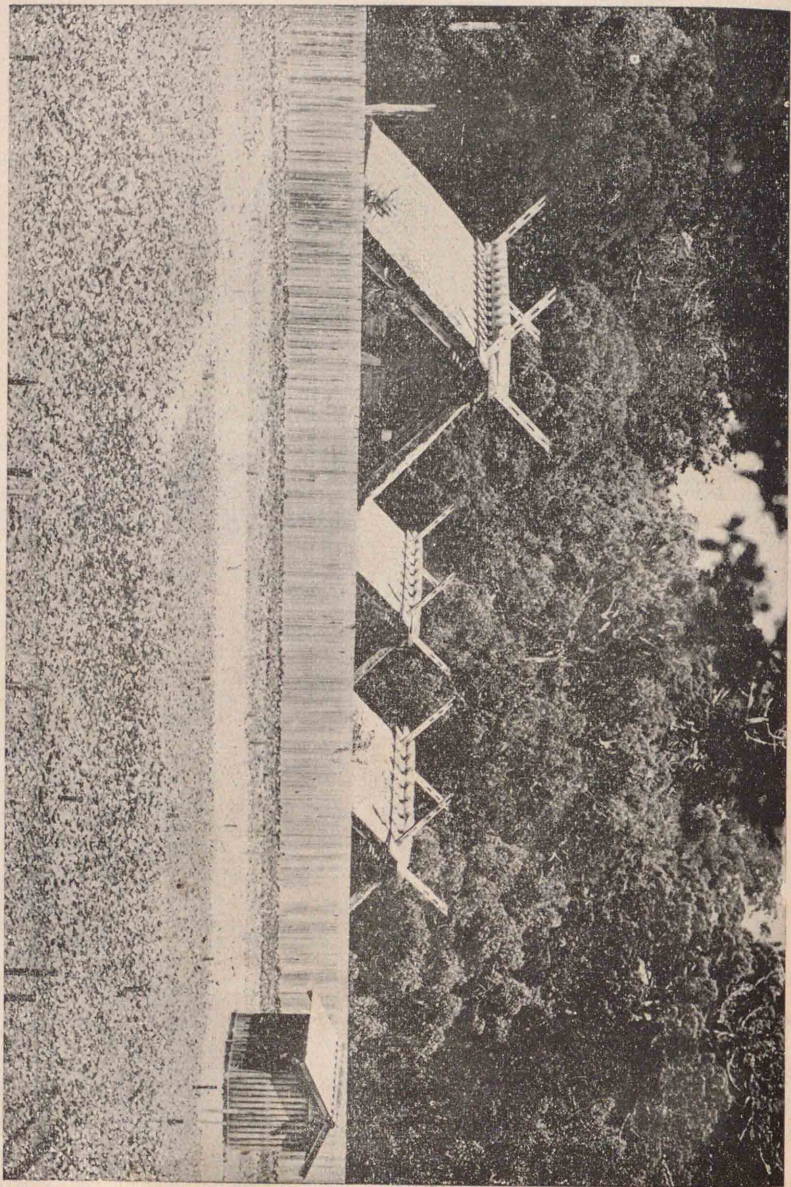
—おもしろい日本歴史の話—

二三 伊勢神宮

伊勢神宮には内外の二宮がある。内宮は皇大神宮と申し奉り、畏くも皇祖天照大神を齋きまつり、御靈代は三種の神器の一たる八咫鏡である。外宮は豊受大神宮と申し奉り、豊受大神を齋きまつる。参宮線山田驛に下車すれば、外宮の神域までは僅かに數町である。神殿の造りさま、御屋根は萱葺で、檜木の白木造、丹青の飾のないところに、神代の質素なさ

齋きまつる

神域

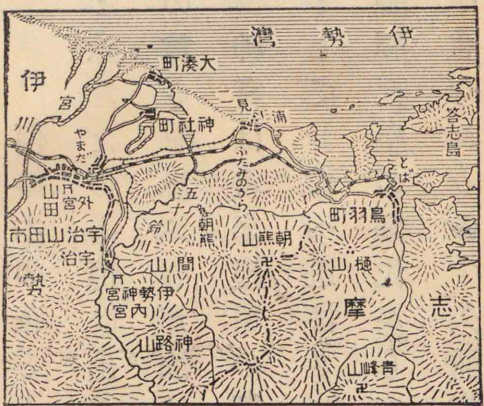


伊勢神宮(内宮)

(一)伊勢國度會郡
大床山に發して
二見に到つて
海に入る

まも想はれて、この上もなく尊い。

外宮に參拜して内宮に參る。間の山を越えて五十町の道



程である。五十鈴川に架けた宇治橋を渡り、神路山の森を仰いで神苑にはいる。廣い芝生に若松の緑新しく、掃ひ清められた道には塵一つない。何といふ心持のよいことであらう。愈進めば生茂つた古い杉、古い檜木、人間の世を離れたやうに思はれて、神威の尊さがしみくと身にしむ。一の御鳥居を潜つて左へ曲り、二の御鳥居を通つて御垣の下に跪く。飾らぬ彫らぬ

(一)松尾芭蕉
名な俳人。元
禄七年(二二
五四年)歿。三
五十一。年

白木造の御宮、神々しといふより外はない。昔芭蕉がここに詣でて、

何の木の花とも知らず匂かな

瞑想をこらす

油然

と詠んだのも憶ひ出され、しばし瞑想をこらす中、我が國體の尊さを思ふ心が油然と湧出るのである。

(二)第九十六代。

神宮は古來皇室の御尊奉最も厚く、久しい間皇女が齋宮としてお仕へ遊ばされる例であつて、數百年間續いたが、後醍醐天皇の御代からその事は絶えた。今は祭主には皇族が任ぜられるので、久邇宮多嘉王殿下が今の祭主宮であらせられる。

一三三 大石良雄 その一

(一)播磨國赤穂郡
城主は淺野内
匠頭長矩。
(二)元禄十四年三
月十四日長矩
吉良義央を江
戸城中で傷つ
けた。
(三)名は滿壽。四
十七士の一人。
(四)名は重實。討
入の前自殺し
た。
(五)通稱内藏助。
(六)名は元辰。四
十七士の一人。
(七)名は信清。四
十七士の一人。

門閥

赤穂の城下は早馬のために大騒となりぬ。江戸城中刃傷の報藩邸に達するや、早水藤左衛門、茅野三平は直ちに馬に跨がりて、日に行くこと三十里、五日にして赤穂に達し、變を國老大石良雄に報じたるなり。長矩自盡の命下るや、原惣右衛門、大石瀨左衛門は更に同じ早さを以て赤穂に達したり。君家事あり、衆情恟々、危機は始めて英傑を呼出せり。門閥に於て國中たぐふものなく、しかも温厚にして庸愚なるが如

器局

光を韜む

き大石良雄は、ここに始めて彼の器局を知られたり。晝行燈の綽名を蒙りて、久しく光を韜める彼は、衆人に驚異せられぬ。赤穂城中の會議は開かれたり。事情は愈、明白になりぬ。大

隱然

恭順

血氣に逸る

城を枕にす

左袒す

野黨の一團は隱然として分れぬ。大野九郎兵衛は良雄と同じく赤穂の家老にして、班は良雄の下に在りしが、長矩に寵用せられ、且年老いて事に慣れたりしかば、勢力は却つて大なりき。彼は専ら幕府の命に恭順すべきを唱へて、成るべく温和に城を明渡さんことを主張せり。然れども血氣に逸る藩士等は、彼を以て卑怯なり、不忠なりとし、上使を引受け、城を枕にして潔く討死すべしと唱へ出せり。良雄は言へり、まづ主君の弟大學頭長廣君をして、主君の後を嗣がしめんことを、幕府に請ふべし」と。

越えて二日、城中の會議は復開かれたり。良雄は前説を繰返せり。大野は異議を述べたり。人々は多く良雄の説に左袒

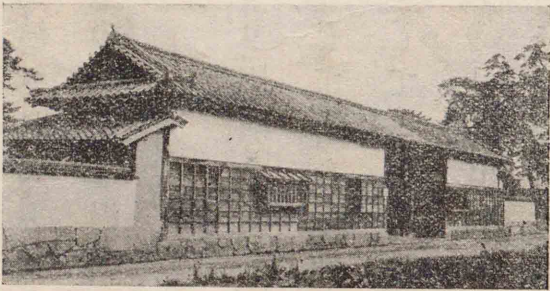
(一)今大垣市、城は長矩母方の従弟。

(二)元祿十四年。

せり。大垣侯戸田采女正は、大學頭を立てんと請ふことの、却つて幕府の怒を招くに過ぎざるべきを報ぜり。逃亡は始れり。四月十三日大野は遂に遁逃せり。人は減ぜり。籠城は遂に行ふべからずなれり。

老人は殉死の議を唱へ、青年は復讐の論を主張せり。良雄は復讐の説を執れり。復讐の説は勝てり。血判に與るもの百十餘人、その中江戸より來つて難に投ずるもの僅かに十八人。

道路は清潔にせられたり。人民は警められたり。四月十八



(穗赤)邸舊の雄良石大

血沸く

日赤穂城の上より受城使の來るは望まれたり。藩士の血は沸けり。良雄は極力彼等をして靜肅ならしめたり。城中より城外へ使者は往返せり。翌日城は難なく明渡されたり。何事かあるべしと待設けたる世人は、赤穂藩士の餘りに温和なるに驚きたり。

待設く

(一)山城國宇治郡
優游自適

良雄は京都の山科(一)に住して、優游自適せり。田園を買ひ、居

天下の視聽

(二)羽前國米澤侯
吉良家の親戚

宅を營みて、永住を装へり。彼はかくの如くして身を四通八達の地に置き、天下の視聽を集め、自ら晦まして上杉氏の謀者を欺けるなり。謀者は雙方より出されたり。上杉氏は良雄を京都に偵察せしめ、良雄は吉良氏を江戸に偵察せしめたり。上杉氏は吉良氏を保護することに努め、人を遣はして吉

偵察

采邑

良氏の邸を守らしめ、且その采邑の人に非ざれば婢僕に用ふることなからしめき。ここを以て吉良氏の事情を探るは極めて難かりき。

(一)長矩自盡の日

年は暮れぬ。記憶すべき三月十四日は再び來りぬ。赤穂の

花謝し鶯老ゆ

(二)京都

華岳寺は市民の手向くる香火に煙りぬ。良雄は在京の同志を集めて、先君の忌祭を修めぬ。かくて花は謝し鶯は老いて、四條河原の夕涼に都の群集雜沓する頃となりぬ。腰拔、賣國、破廉耻の誹謗は愈、良雄の頭を壓せり。しかも彼は恬として關り知らざるもの如し。

破廉耻

恬として關り知らず

(三)通稱忠左衛門、
良雄の故老で、
江戸に在る同
志の統領であ
つた。

一縷の望

忽ち飛報あり、江戸の吉田兼亮(三)より來る。いふ、七月十八日長廣藝州に預けられたり。と。一縷の望は絶えぬ。この時まで

義氣金鐵の如し

義氣金鐵の如く見えし同盟は、弛み始めたり。眞に復讐の志なく、長廣に因りて君家の或は再興せられんことを希望せる人々は、漸く血判を悔い始めたり。或者は久しく音信を絶ち、或者は遁逃せり。良雄は盟書を同志に還して、亦復讐の念なきを示せり。同志の過半は憤激せり。良雄はここに於て彼等にその眞意を語り。而して最も堅固なる最後の同盟は成れり。この年十月に至つて、良雄は妻と二人の幼兒とを外舅石束氏に託し、獨り長子良金(一)を携へて江戸に向かひぬ。

外舅
(一)通稱主税

二四 大石良雄 その二

吉良氏の防衛はなほ密なりき。彼はその本所(二)の邸を以て

(二)江戸本所松坂町

(一)江戸麻生我善坊今徳川侯邸の一部

餘命おぼつかなし

一死を賭す

動靜

卑濕なりとし、これを修補するまで、麻布なる上杉氏の別邸に住まへり。これ彼が刺客を避くる計なりき。同盟は復讐に急げり。殊に老いたる人々は餘命のおぼつかなきを以て、早く事を濟まさんと欲せり。或者は寧ろ白晝公然、吉良氏を襲うて一死を賭せんと欲せり。しかも良雄は聽かざりき。良雄父子は直ちに江戸に入ることを敢へてせざりき。彼はまづ池上の平間村にありて、吉良氏の動靜を覗ひ、十一月五日に至つて、漸く江戸に入れり。父子は變名して垣見五郎兵衛、同佐内と名のりぬ。年少なる良金は始めて江戸を見たりしなり。十二月に至つて吉良氏の邸は成れり。而して夜々怪しげ

(一)通稱勘平。

なる青年はこれを窺へり。彼等は何處より來り、何處へ去るを知らず。五更に至つて他の一隊と交代せり。さすがの吉良氏もこれに氣付かざりき。しかも間諜探偵すべて効を奏せず、秘密は却つて吉良家に出入する茶道より、同盟の一人横川宗利に漏れたり。義央の邸に歸るべき日は明らかになりぬ。復讐の日は即ち定まりぬ。

(二)長矩の室の實家。備後國三次城主。

十二月十三日良雄は卒然淺野長澄の邸に至りて、長矩の後室瑤泉院夫人に謁し、主家の預り金を會計して、その餘剩を還せり。しかも彼の一事はなほ秘して語らざりき。蓋し夫人は夙に賢を以て藩士に欽仰せらる。去年の變、大學頭長廣は老中の命を受け、取る物も取敢へず、走り還つて夫人に告

欽仰す

やはある

げたり。夫人は少しも驚かず、徐に問へり、「仇人は誰にして、その死生は如何」と。長廣は義央の死生を知らざりき。夫人はいへり、「更に登城して後、再びわれを訪はれよ。兄死して、弟たる者仇の存亡を知らざることやはある」と。かくて夫人は終身長廣に會はざりき。

(一)江戸芝高輪。

翌十四日の朝、良雄は泉岳寺(一)に至りて長矩の墓に謁し、三百金を寺僧に寄せて去れり。

霏々

この夕、雪霏々たり。同盟者は漸く集れり。火事装束せる四十七個の人物は、三隊に分れて吉良邸の三面を圍めり。笛聲は雪夜の寂寥を破れり。鬪諍叫喚の聲は聞えたり。すでにして再び笛は鳴れり。火事装束せる四十七個の人物は吉良邸

寂寥を破る
鬪諍叫喚

鹵簿

喧噪

飛語紛々

を出去れり。夜景は初の寂寥に返れり。雪霽れて、夜も亦明けたり。例の如く十五日を祝すべき登城の諸侯と武士とは、城をさして鹵簿を急げり。忽ち聞く、路人の喧噪なるを始めて知りぬ、赤穂の浪士が吉良氏の邸を襲うて義央の首を獲たるを。

風説は區々たり。飛語は紛々たり。いはく、吉良氏を襲ひしものは獨り四十七人に止らず、この外なほ黒装束を爲せる百二三十人ありて、吉良氏の門外を圍みたり。いはく、上杉氏の兵は四十七人を追撃せり。いはく、淺野氏と上杉氏と相闘はんとすと。

良雄は吉田兼亮(一)、富森正因を大目付仙石伯耆守の第に遣

(一)通稱助右衛門
(二)但馬國出石の城主久尙。

官裁



大石良雄筆蹟

りて事實を報ぜしめ、同志相率ゐて泉岳寺に至り、義央の首を長矩の墓に供し、祭文を讀みてその志を告げ、靜かに官裁を待てり。寺は三斗の酒を置きて壯士を勞へり。人ありいふ、「上杉氏の衆至る」と。良雄は同志を警めて防禦の備を爲せり。而して上杉氏の衆は終に來らざりき。この日良雄等は仙石氏の第に招かれ、細川(熊本)、久松(松山)、毛利(長府)、水野(岡崎)の四家に預けられたり。良雄は他の十六人とともに細川氏に、良金は他の九人と

もに久松氏に。

元祿十六年二月四日、四十六人は死を賜はれり。細川綱利は良雄等に訣別の盃を賜へり。良雄は他の十六人とともに、幕府の檢死の前に自裁せり。

自裁す
温藉

長者たる品
失墜す

主一
[Stoics]

良雄は外温藉にして、内に枉ぐべからざる意志を有したりき。彼は何事もうち静めて、騷がしきことを嫌ひたりき。彼はいかなる場合にも、長者たる品位を失墜せざりき。然れども彼は徒に平和を愛するものに非ず。なすべき事は必ずなし、遂げ得べき主一と堅忍とを有したりき。彼はストア學者の表面と戰國武士の裏面とを有したりき。彼は愛すべくして狎るべからず、畏るべくして嫌ふべからざる人なりき。彼

職として
に由る

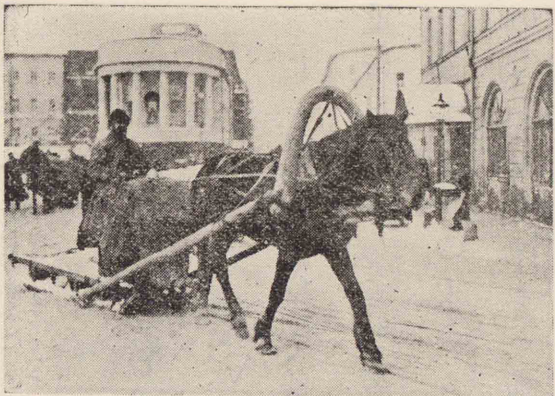
が同盟の首領として成功せし所以のもの、職としてこの品性ありしに由れり。

— 愛山文集 —

二五 露都の四季

一 冬 籠

十一月になると、どこの家でも二重の硝子窓を密閉し、嚴重に目張をして、冬籠の仕度をする。寒さは日増に烈しくなつて、十一月の末から灰のやうな粉雪が降りはじめ。往來の雪が堅く凍ると、馬車は一様に橇と變る。それから五月の初までは、明けても暮れても雪の世界である。その代り雪が降りだすと、天氣は割合に明るくなつて、時には朗かな日光



Steam.

Barack.

露都の雪景

先祖代々バラック式(一)の隙間だらけな小屋に住んで、紙一枚

に浴し得る日もある。一番寒いのはやはり一月から二月へかけてである。暖國の日本人がロシアへ行つたら凍え死にでもするかやうにいふが、そんなことはない。日本人は決してロシアの寒氣に堪へられぬ人種ではない。ロシアの家屋は防寒の爲に特殊な用意がしてある。壁の厚さが二三尺以上四尺もあつて、室内は絶えずスチームや、ロシア特有の暖爐で、どこ(一)の家も同じ温度に暖めてあるから、

の障子で寒風を防いで、火鉢の螢火で僅かに指尖を温めて育つて来た日本人から見ると、冬のロシアの家屋は温室のやうに温い。着物も日本人の冬のやうに、厚着の必要はない。自分は夜分部屋にゐる時は、手拭染の浴衣一枚に襦袢(二)を羽織つて、夜更まで讀書するのが常であつた。しかし半年以上も窓を閉切つて、盛に火を焚くのであるから、室内の空氣は非常に不潔である。それがやがてロシア人に肺患の多い原因なのであらうと思ふ。

Season.

社交

けれども露都のシーズン(一)は冬である。市中大小の劇場や、寄席その他の興行物は、一樣に十月一日に開場して、五月十五日まで打續けるのである。あらゆる社交的の集會も、冬の

[Nevsky.]

シーズンに催される。芝居歸りの夜更に、毛皮の中から眼ばかり出して、雪のネウスキー通に權を飛ばすところに、始めてロシヤ氣分が味ははれるのである。

二 一陽來復

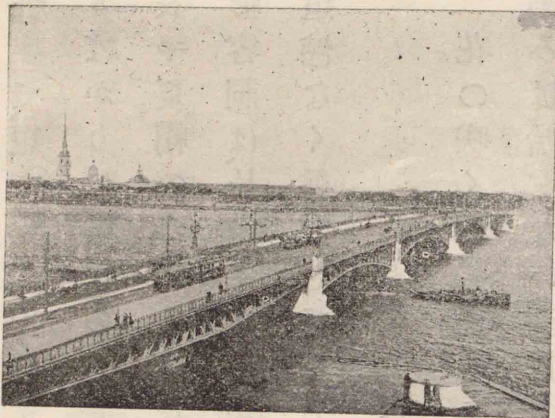
半歳の冬籠を終へて、四月の耶蘇復活祭を迎へる頃は、まだ寒さも強いし、雪も降るが、あと一月で春の草木も芽ぐむといふ樂みから、沈鬱なロシヤ人の顔にも、活々とした希望の輝が見えて來る。雪も寒中の灰のやうな粉雪ではなくて、東京で降るやうな淡雪になる。四月が來て、この淡雪が降りだすと、ロシヤ人は春の音信だと悦び合ふのである。

五月の初になると、一面に凍つた往來の雪も、そろ／＼解

(二)キリスト教に於ける主な祝祭の一。三月下旬より四月に亘る。

[Trotsky.]

[Trotsky.]



橋 — キ ス イ ロ ト

け始める。三四尺も張詰めたネバ川の厚氷の上に架つた冬の橋が撤せられると、川の氷が解けだして、氷河のやうに流れる。大きな氷の島が流れて來ては、橋はしに當つて碎けるのを見てゐると、なか／＼壯觀である。自分は毎度、陽氣なロシヤ人と同じやうに、いつまでもトロイスキー橋の上(二)に立つて、それを眺めるのであつた。ネバ川に氷が見えなくなつて四五日すると、上流の寒地から流れて來る氷で、又もや水の流が見えなくなる。それも四

五日で、氷が流れてしまふと、愈、春である。半歳の間雪に閉ぢられてゐた枯木立は、思ひ出したやうに、一齊に若葉の緑を粧うて、短い夏に後れまいと、大急ぎに生育する。人間もそれとばかりに、毛皮の外套を脱捨てる。氣早の婦人は流行の夏衣や夏帽の身輕な姿を町に見せる。生物蘇生、一陽來復等の形容詞は、長い冬の眠から覺めた五月の北ロシヤの氣分を、遺憾なく言表してゐる。

三 白 夜

花の咲く樹に乏しい露都では、春が來たとて、花を賞する樂みは殆どない。五月の半ばには、大小の劇場が一齊に閉ぢて、公園の夜の遊場が開かれる。洒落者は^(一)パナマや麥稈^{（まきわら）}帽子

Panama.

散策

を冠る。日は次第に伸びて、八時や九時では、晝間と同じである。六月の末から七月の末へかけて、名物の白夜が來る。夜の一時頃ちよつと薄暗くなるだけで、殆ど夜のない世界となる。夜間でも燈火なしに讀書が出来るほどで、いつ寢てよいか見當がつかぬ。遊びずきのロシヤ人は、日の暮れぬをよい事にして、二時、三時までも遊び歩く。公園の遊場の演藝などは、十一時過に開いて、二時過までもやつてゐる。公園の遊では飽足らぬ連中は、二時過から更に馬車をエラトギンの森に飛ばして、夜もすがら森の公園に散策することもある。六月になれば、中流以上の者は我勝に、田舎の別莊地へ避暑に出かける。ネウスキーを歩いて、流行を競つた男女の

往來が、目立つて少くなる。日光に浴し得る愉快な季節は、五月の末から八月一ばいで終を告げて、九月から陰鬱の天地となつて、又々熊のやうな冬籠の生活に入るのである。

—正親町季董の文による—

(一) 俣爵。

(二) Jacket.

略してジャケツともいふ。洋服の上着の短くて腰のあたりまでしかないもの。
(三) ここでは北海道をいふ。

熊 狩 (自修文)

(一) 徳川義親

帽子やジャケット(二)についた雪が解けて、雪が襟からも袖からもぼたぼたと垂れます。もう東京では櫻の蕾が膨つぼみんで來たてせうに、さすがに北(三)の國は春の訪やうれるのもおそく、かうして雪が降るのかなどと思ひながら、だん／＼山を降りて行きました。

傾斜の極めて緩い崖の上に、三抱かかもあるやうなぶなの大木があつて、それに熊の穴の標しるしが刻みつけてあります。

(一) アイヌ人の名。

装壇

銃に彈丸をこめること。

欄々

きら／＼。

意識

かんがへ。心。

(二) 筆者の従者。

(一) トヨは鐵砲を雪の上に刺して置いて、山杖ばかり持つて、ぶなの根本に近づきました。そして、雪が解けてゐる。用心して下さい。といひました。手早く装壇まうだんをして、穴の口に立つて見ると、雪が薄くなつてゐて、穴の口が窪くぼんで見えます。トヨが山杖を取直して突かうとする時、突然、ぐわッ。と熊の叫聲が聞えました。トヨは「あつ。危いッ。」といつて、上手かみてへ逃げました。餘り早いので、まだ穴の附近にも來てゐないものもありました。皆の用意はまだ出來てゐません。私は一足さがつて鐵砲を肩につけると、ぐわッ。と叫んで、頭で雪をはね上げて、金毛を逆立てた熊が躍り出して來ました。最初に眼に映つたのは、爛々らんらんと金色に輝く眸まぶたでした。そして忽ち肩のあたりまで乗出したのです。愈ゐたなといふ意識がはつきりと頭に浮かんで來ました。

餘り急でびつくりしたのは竹内(二)で、主人に怪我けがをさせまいと思ふので、自分も鐵砲を構へて、撃てい。撃てい。とどなつてゐます。私は

血煙
ほとばしって
出る血。

(一)アイヌ人の名。

(二)ともに筆者
の従者。
(三)アイヌ人の名。

熊を發見したら、穴からすつかり出してしまつて撃つつもりであつたのです。しかしかうどなられると、つい氣が急いで、撃ちたくなるものです。その上、距離はちやうど六尺ほどで、この上出て來ると、すぐに飛びかゝられさうで、少し怖くなりましたから、頭を避けて頸筋を狙つて、「ばん」と一發撃ちました。彈丸は左から斜に首を撃抜いて、血煙がほとと散り、雪を紅に染めました。熊はさつと身を引いて、雪の中に見えなくなつてしまひました。二秒、三秒、皆瞬もしないで、穴の口を見つめてゐます。重苦しい息のつまるやうな沈黙が續きました。

暫くして私は、「死んだのかも知れない」といひながら、穴に近づいて見ました。トヨもテレケも來てのぞいて見ましたが、口元に死んでゐるはずの熊が見えません。熊はまだ死んでゐない。さあ熊を雪の中から掘出すんだ。穴の口を閉塞しなければいけない。」

そのうちに久保田と稻垣とボウが、二間ほどの木を伐つて來ま

した。その三本の木を穴の入口に立てて、熊が急に飛出せないやうにして置いて、雪を除始めました。

三十分ほどで穴の口の雪はすつかり除けられました。トヨが山杖をさし入れて突くと、熊の體にとゞきました。いくらひどく突いても、うなりもしません。大分に弱つて死んだらしいといふのに勇氣を得て、我もくと突いて見ました。松田君も突いて見て、やがてはつてのぞいて見ると、急に飛上つて、生きてゐる。おつかない眼でぎよろつと睨んだ。といつて、穴の口をどきました。

愈、仕方がないので、このまゝ雁木なりに枝を残した木を伐つて、熊の頸にかけて引出すことにして、一番若いボウがその役目に當りました。

ボウが熊を引出しに掛つたので、他の者は用心の爲に少し離れて、私一人穴の口に立つてゐました。ボウが頸に木の股をかけると、今まで死んだやうに黙りこんでゐた熊が、突然ぐわッ。とうなりま

(一)筆者の同行者。

雁木なりに云
云。下むきになつ
た枝のついた
木。

緊張する
ひきしまる。

した。ボウはびつくりして、木をはふり出して、飛退とびひききました。
 熊は一本残してあつた木をがり〜と噛んだかと思ふと、忽ちそれを棄て、眞紅な口を開け、牙をむき出し、毛を逆立てて、猛然と襲ひかゝつて來ました。ぐわッ。ぐわッ。とうなるたびに吐く息が、眞白に凍つて、毒氣でも吐きかけられるやうな氣がします。
 「出たッ。氣をつけるッ。危いッ。眞正面から向かつては危いッ。もう少し後にッ。なごごなる聲が聞えましたが、もう他の事を考へる餘裕よゆうはありません。距離は忽ち四尺ほどに迫りました。もうこれ以上近づけては危険です。ぱんと一發、續けてまた一發、二發とも頭を貫いたので、熊は勢で前にのめつて、足下あしもとに斃あれました。
 興奮して緊張きんきょうしきつてゐた氣分が一時に緩んで、暫くは誰もぼんやりと、斃れた熊を見たまゝ、黙つてゐました。やがて寫眞機を持つて活劇を寫してゐた久保田が「萬歳」と叫んだので、我にかへつたやうに、皆が「萬歳」とどなりました。

熊を發見したのが十二時四十五分、愈撃止めたのが一時四十分。約一時間を要しました。



熊 狩

テレケが耳をつかんで、ずる〜と引つばつて見ると、六尺くらゐ、中等大の牡熊おとこくまです。餘程古くて荒い熊と見えて、鼻の上に古い傷があり、牙が一本缺けて、爪は半分白くなつてゐました。トヨは「この熊は人を食つたことがある。牙が一本缺けてゐるから」といひました。アイヌには熊が人を食ふと牙が缺けるといふ言傳があるのです。

アイヌは私のマキリで、熊の胸の皮を二寸ほど切りました。これは撃つたその日に皮を剥ぐべきですが、それはしませんから、その形式なのです。そして頭を束の方へ向け、首の下に二尺くらゐの細い木を削りかけ

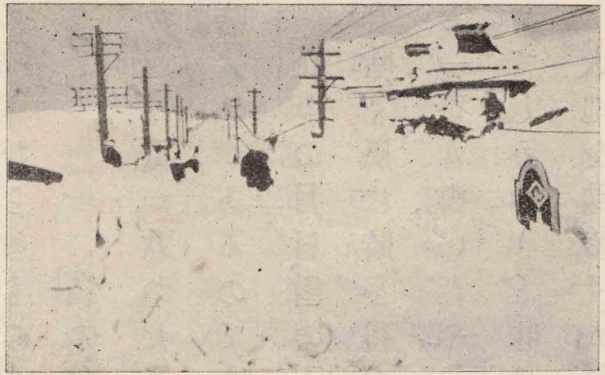
マキリ
アイヌの長さ
一尺ばかりの
ナイフ。
削りかけ
けつり去らす
にその片をそ
のまゝにつけ
ておくこと。
御幣のやうな
形になる。

して敷き、前に辨當の残を供へて、熊と山の神に祈をあげました。それは、熊には我々に怪我もなくとられたのを感謝し、山の神には熊をここに出してくれたお禮を申し上げるのです。祈が濟むと、柴を切つて熊の周圍に立て、鳥や狐のよりつかないやうにして置いて、歸途につきました。

二六 北國の初春

相馬 御風

六七尺も積つてゐた雪が、いつの間にかすつかり消えてしまつた。解けた雪は、解けるあとから、殆ど全く人間に氣附かれずに、蒸發したり、大地に吸ひこまれたり、流れ去つたりして、どうしてなくなつたかわからぬやうになつてしまつた。



越後高田の雪

幾月かの長い間、深い雪の中に閉ぢこめられてゐた北國の子供等が、久しぶりで黒い大地の面を見出した時に、歡ぶ有様は、全くいつて見やうのないものである。まだ可なり深く消残つてゐる雪の所に、黒く濕つた土がのぞき初めると、子供等は言合はせたやうに、次々にそこへ集つて行く。そして殆ど躍り出さんばかりのうれしさで、土を踏廻る。田や畑の所々に見えだした黒土の斑點には、鷗や、鴉や、雀がまづ群をなして集る。彼等の

(一) 越後出雲嶺の僧。天保二年(一四九一年)一月寂す。七十四年。

やをら

(二) 俳人。信濃柏原の人。通稱小林彌太郎。文政十年(一八二八年)四月二十五日歿。

上にも生々した歡が輝いて見える。
。むらぎもの心たのしも春の日に

(一) 鳥のむらがりあそぶを見れば

かう良寛が歌つた心持も、特に雪國に住んだ者に、一層深い味はひがあるのである。

「長々の月日、雪の下に忍びたる露、蒲公英のたぐひ、やをら春吹く風に時を得て、雪間々々をうれしげに首さしのべて。」
と一茶が書いたやうな若草の歡も、雪國に住む者にして、始めてしみぐと味ははれるのである。

大地を踏歩く人の足音の久しく聞えなかつたのを、靜かな夜にふつと聞きつけた時の、一種微妙な懐かしみと歡ば

しさ。そんな心の經驗も、雪國に住めばこそである。

あづさ弓春になりなば草の庵を

とく訪ひてまし逢ひたきものを

かういふ良寛の歌も、北國の冬といふことを考へないでは、なかく理解されない。

全く北國の住民の春を待つ心には、測り知れない深さが窺はれるのである。
樹かけ

二七 三等列車 松岡讓

ごみくした三等列車は、昨夜からの人いきれで、朝になつてもまだ濛々と烟つてゐた。ちやうど冬の間だけ雪の降

人いきれ

獻酬

らない地方へ出稼に出て小金を懐にした連中が、雪消ともにも勢ひこんで、元の古巢へなだれこむ季節なので、車室の中のにぎはひは、全く喧噪を極めてゐた。車室の中ほどには大工らしい倔強な男が七八人、元氣でへうきんな掛聲もろとも、餘念なく藤八拳を戦はしてゐる。そこから二つ三つ座席を隔てた所では、これも同じく逞しげな職人體の男が四五人、てんでに素焼の茶碗を獻酬しては、色々な俗謡をうなつてゐた。

身動きの出来ないくらゐな人が、車の中にぎつしりつまつてゐるのに、まだプラットホームの人波を泳ぐやうに、乗切つて、人ごみからはみ出した人々が、無理無體に車内へ割

立ちほだか

りこまうとしてゐた。すると先に乗りこんだ職人連中が、扉の把手をしつかり内から引いて置いて、わざと窓から首を出して、新來者を威嚇するやうに立ちほだかつた。ここかしこに小競合こぎあひが始つた。するうちに列車が動き出すと、車内では誰彼の區別なく、思はず「萬歳」の鬨の聲を爆發させた。それがプラットホームの見送人に傳染すると、今度は見送人から次の車へ傳播して行くうちに、汽車は萬歳聲裡に、まるで出征軍人か何かのやうに、停車場を離れたのである。

今の萬歳に景氣づいた車中は、それ切り熱を下げないで、はしやぎどほしにはしやいた。最初黙つてすましてゐたものまでが、この場の空氣にかぶれて、追々負けずにはやした

てるやうになつてからは、とう／＼車中残らずといつても
 いくらゐ、無禮講の懇親會みたやうなものになつてしま
 った。それでも眞夜中の三四時間は、さすがに遊びくたびれ
 たと見えてひつそりしたが、その僅かな休息の時間が過ぎ
 るともう夜明前から、又昨夜の續が始つた。しかし、汽車はた
 だ送ることのみに責任と興味を感じるかのやうに、さうし
 て何の爲に何を乗せて送るかについては、てんで目をつぶ
 つて、ひたはしりに目的地へ走つてゐた。
 車窓をよぎつて柔な陽炎かげろふに包まれた大きな山のいくつ
 かのひだが、とろんと淀んだ薄紫をたゞへて、遠く近くゆる
 やかに又せはしく様々に走つた。さうしてひだの走るにつ

れて、その嶺をすべる大きな弧線がする／＼と傾いたと思
 ふと、それが落切らない間に、又新しい瑞々したぼうつと烟
 りかけた線が、ちやうど銀色にぼかさされた兎の背のやうに、
 ふんわりと現れて來ると、近い山の大きな背と背の間に、遠
 い連山が水晶のやうな眞白い波頭を、くつきりと擡もたげてゐ
 る。車窓から見える天地は、山から麓、麓の村から平野へかけ
 て、一面に甘つたるい水蒸氣がどろんとして淀んでゐるの
 を、夢見勝な春の日が、懶だまさうに遠くから暖い息を吹入れて、
 ふくらましてゐる。けふは汽車の烟さへ、まるで白い飴細工
 か、それとも兎の毛をまるめたマツフル(一)か何かのやうに、ぬ
 るまつこさうにのんびり溢れた水田の面に、ゆるやかな白

Murfle.

い影を浮かして、飛びもやらず、兒童のゑがいた汽車の煙そのまゝ、後から後からといくつも輪をなしてつながつてゐた。山の麓の村々に、所々白く忘れられたものは、大方梅が満開なのであらう。

海岸を離れてから、いくつも山懷を突破つて進んで來ると、愈、故郷の停車場が近づいた。別を惜しむといつた氣持の働くものと見えて、どこかにやけな騒々しさが際立つて車中を占領して來たが、私は早く停車場に着けばいい、さうして一時も早くこの亂雑な、せゝこましい息のつまりさうな場所から逃れたいと思つた。

大きな河の鐵橋の赤い支柱が、箒はきのやうに行過ぎると、故

後めたい

郷の村を抱いてゐる大きな山懷が、遙か一體の青黒い霞を隔てて、心持せり上つた平野のはてに眺められた。さうしたマッチ箱のやうな小さい停車場は、すぐ窓近く現れて來た。ここまで來ると、女工の群が大部分腰をひつ立てた。大工連中が綱棚から荷物をおろし始めた。見る見る乗客の三分の一くらいが騒々しく立上つた。私はこの不行儀の出稼人が大部分土地の人らしいのを見ると、妙に當惑した。さうして自分も同じくこの停車場へ降りるのが、何となくはづかしくて、後めたい氣持さへした。

——法城を護る人々——

二八 雨 後

德 富 蘆 花

三月七日。

養花の天

近來よく降る。降らなければ曇る。いはゆる養花の天。

けふは日が出た。朝から暖だ。鶏の聲が殊に長閑に聞える。きのふ終日終夜の雨で、畑の土も眞黒に潤うた。麥の緑が目立つて濃くなつた。緑の麥は見る眼の歡喜である。それが軟な日光に笑み、若しくは面を吹いても寒からぬほどの微風にそよく時、或は夕雲の翳かげに青黒く黙する時、花何ものぞといひたいほど美しい。

隣家ではもう馬鈴薯を植ゑた。

(一)東京府豊多摩郡

午後少し高井戸の方を歩く。米俵を積んだ荷馬車が来る。行きずりにふと目にとまつた馬子の風流、俵に白い梅の枝が挿してある。白い蝶が一つ、黒に青紋のある蝶が一つ、花にもつれてどこまでもと、ひらく／＼飛んでついで行く。

朝の模様では、けふは美晴と思はれたが、やはり氣の定まらぬ日であつた。時にざあと時雨のやうに降つては止み、東に虹が出たり、西に日が現れて遠方の屋根が白く光つたり、北風が来て田圃の小川を縁どる女竹の藪やぶをざわ／＼鳴らしては、きら／＼日光を跳らせたりした。空の一部は印度藍インドチヤウ色に濃く片曇りがして、村と緑の麥の一部とはまぶしい片明りがしてゐる。

—み・すのたはこと—

二九 太陽と春

福田正夫

やはらかい風が

輝いた海洋から地上にのぼる。

光つてゐる畑、

光つてゐる樹、

光つてゐる葉、

一つ一つがみんな春の呼吸。

緑の春はたのしげに搖ぎ、

よろこばしげに搖ぎ、

「生きてゐる。生きてゐる。」と光の中でさゝやく。

黒い土がその下で燃えながら、

黙つて光を吸ふ。

もえ立つ春の碧の空、

忍んだ冬の寒い憂鬱から、

南の國の春は解放される。

枯草の間の小さな草の葉、

菜の色、大根の色、

ふか〜とこめた太陽の愛、

とけるやうなやはらいだ空氣、

いま、路をゆるやかに行く農夫、

その手が光る、

その鍬が光る。

解放

輝いた地上の光に、
とけ行く愛の世界の春。

——現代詩人選集——

三〇 子供等

吉田絃二郎

「坊つちゃん、もうおうちへ歸りませう。」と婆やがいつた。
子供等は緑の小山の上に遊んでゐた。

「まだお日様があるんぢやないか。」子供はかういつた。

落日はまだ緑の丘の上にかゝつてゐた。

「それではお遊びなさい。」

ふたゝび子供等は草の上を樂しげにとびまはつた。最後の日の光が漂つてゐたまで。

(1) Soene.
(2) Blake.
イギリスの詩人。(西暦一七五七年—一八二九年)

このやうな⁽¹⁾シーンを⁽²⁾ブレークの詩で讀んだことがある。
小鳥とともに目をさますものも子供等である。太陽とともに踊るのも子供等である。落日の最後の光まで草の中を駈けずり廻るのも子供等である。光に恵まれ、土の香に恵まれ、軟な春の風に恵まれるのも子供等である。

太陽の光のいかにうれしく、いかに懐かしいかを知るのも子供等である。

雪がちら／＼と降つてくれば踊り、風が吹いてくれば路地中を走り廻つて歌ふのも子供等である。椿の花に來て鳴く目白の眞似をするのも子供等である。落ちた椿の花を絲に通して、花輪を首にかけては、王様のやうな幸福な心を持つ

つことの出来るのも子供等である。
 くわりんの花が咲き、石榴の花が咲いたのを、ほんたうに
 驚異の黒い瞳をみはつて、小半日窓から見つめてゐるのも
 子供等である。
 賣られて行く仔牛の背に秋の雨がそぼふつてゐるのを、
 窓から眺めてゐるのも子供等である。
 蠶豆畑そらまめの隅に死鳥を葬る爲に深く掘られたばかりの穴
 をのぞいて、しやがんでゐるのも子供等である。
 野火を眺めて、未知、神秘の世界に夢をゑがくのも子供等
 である。
 母の背から小さな手をのばして、空のお月さまが手にと

れると信じ切るのも子供等である。

地震があつても、大風が吹いても、母といふものの懷を無
 限に信賴することの出来るのも子供等である。

父の懷から取出されたお土産の獨樂一つに、世界中の光
 を浴びたやうな幸福を見出すことの出来るのも子供等で
 ある。

Caluloid.

兵隊さんと、玩具店のセルロイド(一)の人形とを一緒くたに
 考へて、世界中の幸福といふ幸福を黒い瞳に見てゐるのも
 子供等である。

やがて子供が娘となり、青年となり、母となり、父となる時、
 彼等は太陽の光を知らない。落日を見ない。軟な風を感じな

い。小鳥の聲を聞かない。

子供等の心を失つた人間ほどあはれなものはない。生活に追はれる大人の目はいつも黒い土ばかり見てゐる。

「空には星があつた。一年に一度くらゐ、不圖夜の空を仰いでこんなことを思ひ出すこともある。」

草光る

ポ 子 (自修文)

二葉亭四迷

うれしいにつけ、悲しいにつけ、憶ひ出すのはポチのことだ。

春雨のしとくと降る薄ら寒い或夜のことであつた。私は例の通り宵の口から寝てしまつたが、ふと目を覺すと、耳もと近くに妙な音がする。ごうといふかすとすればうと、或は高く、或は低く、單調ながら拍子を取つて、さながら大鋸で大丸太を挽割るやうな音だ。

(一)小説家。本名は長谷川辰之助。二葉亭四迷はその號。口語體小説の創始者。明治四十二年歿。年四十六。

單調 變化のない調子。
大鋸 おほのこぎり。む。おほがともよ。

囃子 鳴物で調子をとること。
間の手 歌と歌の間にひく音曲。
氣壓る いきほひにおされる。

けたたましくとんきやうにめいる。洗みこむ。

私は夜中にめつたに目を覺したことがないから、初はびつくりしたが、よく研究して見ると、なに父の躰なので、やつと安心してそのまゝ再び眠らうとしたが、どうもこれが耳に附いて、寢附かれな仕方がないから、聞えるまゝにその音に聽入つてゐると、いつからとなく囃子の手がこんで来て、間の手に、遠くてかすかにきやんきやんといふやうな音が聞える。躰が凄じい時には、それに氣壓れて聞えぬが、躰が低くなると、はつきりと手に取るやうに聞える。不思議に思つて益、耳を澄ましてゐると、間の手の方が次第に大きく高くなつて、終には躰と離れ、に、確か門前に聞える。

かうなつて見ると、疑もなく小犬の啼聲だ。時々喉でも締められるやうにけたたましくきやんくと啼立てる。その聲尻がやがて段々に細く悲しげになつて、めいるやうに遠い、所へ消えて行く。かすとすれば、忽ち又近くで、堪へきれぬやうに啼出して、くんと鼻を鳴らすやうな時もあり、ぎやおと欠伸をするやうな時

もある。

私はそつと夜着の中から首を出して、小さい犬の聲だねえ、どうしたんでせう。」と、うるさく母に聞くと、母は優しく、「どこかの人が棄てた犬だらう。」と、一々説明してくれて、「もう晩いから黙つてお寝。」とあちらを向いてしまった。

私も亦夜着をかぶつた。犬は門前を去つたのか、啼聲が稍遠くなるにつれて、父の躰が又うるさく耳に附く。寝られぬまゝに、私は夜着の中で棄犬の有様を繰返し繰返し考へた。まづどこかの飼犬が縁の下で兒を産んだとする。ちつぽけなむくくしたのが重り合つて、首をもたげて乳房を探してゐるところへ、親犬が餘所から歸つて来て、その側へどつさり横になり、片端から抱へこんで舐めると、小さいから舌の先でたわいもなくころころと轉がされる。轉がされては大騒して起返り、又よちよちとはつて、ほつちりと黒い鼻面でお腹を探り廻り、漸く思ふ柔な乳首を探り當て、あわてて吸附

お腹もくちく
なる
満腹になる。

いたいけ
う。幼くかはいさ

いて、小さな両手で揉立てくく吸出すと、甘い温な乳汁が出て来て、喉へ流れこみ、胸を下つて、何ともいへずおいしい。と、腋の下から、まだ乳首にありつかぬ兄弟が、鼻面で割りこんで来る。取られまいとして産毛の生えた腕を突張り、大騒をやつてみるが、とうとう取られ



葉亭四迷

れてしまひ、又そこらを尋ねて、他の乳首に吸附く。そのうちにお腹もくちくなり、親の肌で身體も温つて、とろけさうな好い心持になり、つい、うとくと

夢心地にもあわてて又吸附いて、一しきり吸立てるが、ちきに又たわいなくうとくととなつて、乳首が終に口を脱ける。脱けるも知らずに口を開いて、小さな舌を出したなりで、一向正體がない。その時忽ち暗闇から大きな腕がぬつと出て、正體なく寝入つてゐるところをむづと掴み、宙に吊す。驚いて目をばつちりあけ、いたいけな聲

足搔
手足の運動。

濡れしよぼた
れる。びしよぬれに
なる。
途方にくれる
どうしようか
と方法にまよ
ふ。

て悲鳴を揚げながら、四足を張つてもがく中に、頭から何かで包ま
れたやうで、眞暗になる。窮屈で息が塞がりさうだから、出ようとす
るが出られない。暫くもがいてゐる中に、ふと足搔が自由になると、
領元を撮まれて、高い高い所からどさりと落された。うろくとし
てそこらを視まはすけれど、何だか變な淋しい眞暗な所で、誰もゐ
ない。ぼんやりとしてゐると、雨に打たれて、見る間に濡れしよぼた
れ、おそろしく寒くなる。身慄一つして、くんくんと親を呼んで見る
が、どこからも出ては來ない。途方にくれて、よちくとはひ出し、夜
中にたゞひとり、温な親の乳房を慕つて悲しげに啼廻る聲が、さつ
き一度門前へ來て、又どこへかさまよつて行つたやうだつたが、そ
れがいつか又戻つて來て、どこをどうもぐりこんだのか、今は啼聲
が正しく立關先に聞える。

私はたまらなくなつて、母に頼んで、この小犬に食物を與へて、一
晩泊めてやることにした。犬嫌の父は、泊めたその夜を啼きあかさ

(二)葉亭四迷作
の小説。

れると、うんざりしてしまつて、あくる日は是非追出すといひ出し
たから、私は小犬を抱いて逃げまはつて、どうしても放さなかつた。
父は困つた顔をしてゐたが、しかしこれも一時のことと、その中に
小犬も獨寢に慣れて、夜も啼かなくなる。追出すはずのものにいつ
しかポチといふ名まで附いて、姿が見えぬと、父までが一緒に捜す
やうになつてしまつた。

—平^(一) 凡—

三三 松と大和心 池邊義象

自然は人生の鑄型で、人間は常にその鑄型の中に泳いで
居る。随つてその影響感化の多大なことは、素よりいふまで
もない。況して人間は種々に理窟をつけて、自然を味ははう
として居るではないか。本居宣長が^(二)一たび敷島の大和心を

(一)國學者。鈴屋
勢松坂の人。伊
享和元年(二
四六一年)歿。
年七十二。

(一)水戸の藩士
名は彪安政
二年(二五)
五年(一五)
十(一五)
萬朶の櫻

櫻花に比して以來、又藤田東湖が萬朶の櫻を神州正大の氣の發して成つたものと唱へて以來、櫻は大和心の異名と稱へられるまでになつた。これは素より異論のないところで、誰も争ふものはないが、余はたゞ櫻が大和心の特質全體を表して居るとは信じない。そこでこれに松を附加へて、その缺を補ひたいと思ふ。

(二)「尾張にたゞ
に向へる尾津
の嶋なる一つ
松あはれあり
松あはれあり
せば衣きせま
しを、太刀は
けました。」

松の起りはどこの種にあるか知らないが、現世界に於て、我が國のやうに松の多い所はあるまい。又土地に適當してかやうに見事に發生して居る國もあるまい。この點に於て、松は日本の木であるといつても差支はないと思ふ。彼の日本武尊が「尾津の崎なる一つ松」と御詠みになつたのは、隨分

古い事であるが、松はそのずっと以前から、我が國の到る所にあつたものと思ふ。櫻が日本の花であるとともに、松は確かに日本の木である。

この松の露霜を凌ぎ、雪霰を冒して、少しもその色を改めない高い操の如きは、今更いふまでもなく、我が大和心の雄雄しさに比べて、決して不足はない。又大抵の草木は美花を着けて、世に媚び人に阿るのに、松だけは不動の姿勢を取つて、そんな人目を喜ばせるやうな、婦人群小の仕業を嘲笑して、いつも緑色を保持し風潮に動かされない有様は、正に大丈夫の態度を備へて居ると見なければならぬ。殊に年を経るとともに、その幹が龍の如く、虎の如く、鳳凰の如く、麒麟

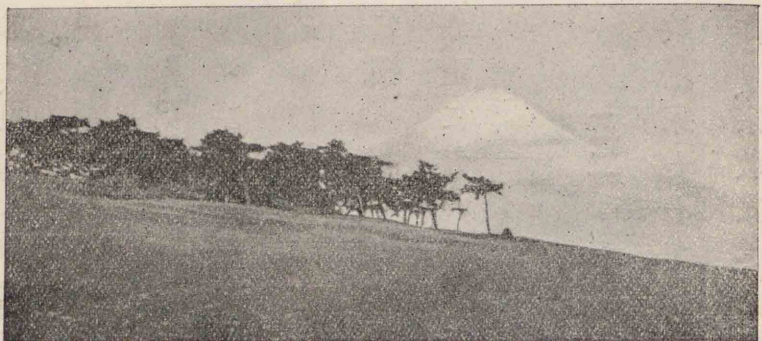
風潮

彈琴の響

の如く、世人に畏敬せられ、愛重せられるさまは、元勳、偉人にも譬ふべきであらう。

松はかくの如く剛性のものであるが、一たび吹く風を宿せば、彈琴の響を傳へ、或は長堤十里、霞を敷き、霧を吹いて、まるで繪のやうな光景を呈することがある。又波打際に枝を垂れては、水とその清さを争ひ、或は少年少女に引かれてその齡を延すなど、その優美柔和な點に於ても、亦我が大和心に通ふことは決して少くない。松島や、三保や、天橋立の如きいはゆる天下の奇勝を以て鳴る土地が、松に負ふところの少くないのも、國民がそれ等の勝地を歎賞して已まないのも、謂れがないわけではあるまい。

堅忍不拔
泰然自若



かやうにいひたてれば限りもな
いが、剛柔両性を具備して、堅忍不拔、
泰然自若として風潮に動搖しない
三のは、自覺ある日本人に比して、斷じ
保て不足はない。一時に咲き一時に散
のるその潔き有様や、花に一點の醜を
松とよめないその美は、櫻を以て花の
原第一とし、我が大和心に似て居ると
ころを賞するのは、今更いふまでも
ないが、この松の貴ぶべきところも、
亦大いに味はふべきである。況やこ

津々浦々

表徴

の木は、畏くも神前、宮廷をはじめ、津々浦々に至るまで、一本を見ない所はなく、風景に、盆栽に、繪畫に、我が國人が昔からこれを好むのも、その心が互に相通ずるからであらう。

あゝこの松、剛柔両性を備へる松、全國全家悉く有する松が、どうして我が國民に感化を與へないで居らうか。余はここに櫻と相並べて松を以て日本の木とし、大和心の表徴として、更に大いに賞揚したいと思ふのである。

三三 聖徳太子

萩野由之

政治家としては、新に大陸文明を輸入して大化改新の基を作り、宗教家としては、佛教を奨励して各宗から太子様と



聖徳太子七歳の木像
(大和法隆寺安置)

成文法

(一)用明天皇の長子。推古天皇の二十九年(二八一年)薨。年四十九。
(二)第三十一代。
(三)第三十三代。輔佐す

非凡な天資

尊ばれ、法律家としては、成文法の始といはれる十七條の憲法を制定し、さうして又工藝家からはその技術の開祖の如く尊敬せられ、あらゆる方面にその道々の元祖の如く仰がれるのは、^(一)厩戸皇子である。

皇子は用明^(二)天皇の御子で、推古^(三)天皇の御時に皇太子として攝政をなされ、天皇を輔佐し奉つて、政治上、宗教上、工藝上、文學上、種々偉大な功績を残されたお方であるが、御幼少の時から非凡な天資は顯れていらせられた。皇子御幼年の時、或日父の皇子即ち後の用明天皇は、王妃とともに皇子を伴なうて、宮中の御庭に今を盛と咲いてゐる桃の花を御覽なされたことがあつた。その時、父君は御子の智慧を試して見

ようと思し召されて、

「そなたはこの桃の花の紅を美しいと思ひますか、又はこの松の葉の緑を美しいと思ひますか。」と御尋ねになつた。すると皇子は、

即座

「桃の花は美しうございますが、それはたゞ一時の事です。松の緑は四季に色が變りませんから、私はこの桃の花よりは、あの松の色を愛します。」と即座にお答へ遊ばされたから、さすがの父君も大いに驚いて、一層御寵愛遊ばされた。

このお答は、幼年の御方としては珍しいお考であるが、成長の後に諸の政治上の改革に就いては、色々な障碍も起つたであらうに、いつもそれにうち勝つて事を成遂げられた

故障を排す

その勇氣と志操は、この松の緑の四季にその色が變らず、霜や雪の故障を排して常磐木の操を立てるのと相似てゐるではないか。桃の花のやうに、一時にばつと美しくはでな事をして、末の遂げぬ時には、大改革も大事業も成功するものではない。桃と松の答は、吾人の好い教訓である。

又或時皇子は他の諸皇子と一緒に、お庭先で遊んでいらせられたが、何かの事の間違から、激しく口論に及んで、大分騒々しくなつた。これを聞かせられた父君は、懲しめの爲にとあつて、鞭を取つて御縁先までお出でになつた。

すると他の方々は、皆鞭に打たれるのが恐しさに、我先にと逃隠れられたが、たゞこの皇子だけは、少しも逃隠れられ

平身低頭

ないのみか、父君の御前に出て、平身低頭していらせられた。そこで父君は怪しみながら、

「そなたはなぜ逃げぬのか。」とお尋ねになると、皇子は恭しく一禮して、

「逃げましたところで、天へも昇られず、地の中へもはいられませぬ。それよりは正直にお鞭を受けたいと思ひまして、ここに居るのでございます。」と申し上げられたので、父君は却つて皇子の正直をお褒めになつたといふことである。

この正直な心がけが、四季變らぬ松の緑のやうに、皇子一生の本領となつて、いつも御事蹟にあらはれてゐる。それ故、皇子のお定めになつた十七條の憲法の中にも、正直といふ

本領

光彩を放つ

こと、平和といふことなどが主に諭されてある。平和は正直から起るので、正直はまた成功の基であるからである。

皇子の御事蹟は種々な方面に光彩を放つてゐるが、かゝる大人物の幼時には、かくの如き事があつたのである。大人物となるには、幼時からの修養が最も大切である。

— 讀史の趣味 —

三三三 皇室と國民

西洋各國の歴史を見よ。支那の歴史を見よ。一朝亡びて一朝興り、革命に次ぐに革命を以てし、きのふまでは九五の位にゐましし帝王にして、けふは斷頭臺上の露と消え給ひし

革命
九五の位

Siberia
(西伯利)

不可解

も少からず。近くは全ロシア皇帝の、俄にその位より逐はれてシベリヤに一流人となり、やがてはかなく成り給ひしが如き、我が國民より見れば、殆ど不可思議、不可解の感なくばあらず。外國の事情をのみ知りて、日本の國史に明らかならざるもの、動もすれば世界の近況を見て、我が國家の將來を危む。これ實に我が皇室と國民との關係を知らざる徒なり。外國の歴史の記すところを見よ。國王と國民とは從來仇敵に等しかりき。國王はあらゆる豪華を極め、あらゆる収斂を敢へてして、たゞ自己の慾を満たさんことに努め、姦臣これを助けて、暴虐至らざるなし。國民の憤怒は火山の噴火の如く、抑壓その極に達して後、革命となりて爆發す。歐洲各國

収斂

愛撫

豊穰
(第六十代)

の歴史皆然り。支那歴代の興廢は、幾回となくこれを繰返したるに過ぎず。王者と人民との争はてしなきに至りて、民衆は自由を求めて止まず、その極るところ共和政府の設立となれるは、今古外國史の示すところなり。

我が皇室、人民を愛撫し給ふこと初より父母の親みの如し。百姓を稱へてオホミタカラ(大御寶)と稱へ給へるは、上古よりの事なり。人民は皇室の別家なりといふ考もて、自らヤッコ(家の子)と稱せり。古來の神祇を祀るや、天皇は民の爲に年の豊穰を祈り、人民は天皇の爲に玉體の安全を祈りて、曾て私の利害の爲に禱らず。仁徳天皇の宮室を營み給はざりし、醍醐天皇の寒夜に御衣を脱し給ひしを始にて、

(一)後醍醐天皇御製

(二)後柏原天皇御製
治め知る

紛擾
權臣

鞏固

(一) 世をさまり民安かれと祈るこそ
わが身に盡きぬ思なりけれ

(二) 治め知る我が世いかにと浪風の
やそしまかけてゆく心かな

の御製は皆同じ御心なり。

日本歴史の紛擾は、皇室間の御不和か、權臣が野心の結果にして、一として皇室と人民との間の争たるものなし。これ實に各國の歴史になきところにして、萬世一系たる皇統の、世々を経て益鞏固を加ふる所以なり。

三四 君が御代

よみ人しらず

(一)甲斐國東山梨郡七里村
(二)同郡八幡村笛吹川の岸

(三)平安時代末の歌人。建永元年(一一八六)八月。薨。年三十六

(四)平安時代末の歌人。建仁四年(一一二四)年。薨。年九十四

(五)鎌倉三代將軍。頼朝の第二子。承久元年(一一九一)年。薨。年二十八

(六)後醍醐天皇の皇子

(一) しほの山さしでの磯にすむ千鳥
君が御代をば八千代とぞ鳴く

(二) わが國はあまてる神の末なれば
日の本としもいふにぞありける

かみ風や五十鈴の川の宮ばしら
幾千代すめとたてはじめけん

山はさけ海はあせなん世なりとも
きみにふた心われあらめやも

(三) 藤原良經

(四) 藤原俊成

(五) 源實朝

(六) 宗良親王

(一)京都の歌人
安政元年
五月十四日
年五十八 歿

君のため世のため何か惜しからん
すててかひある命なりせば

本居宣長

さしいづるこの日の本の光より
高麗もろこしも春を知るらん

千種有功

天地とたち分れけん始ありて

はてこそなけれ葦原の國

帝國新讀本 卷二終

大正十三年十一月三日印
大正十三年十一月六日發
大正十四年二月十二日訂正再版印刷
大正十四年二月十四日訂正再版發行

(本讀新國帝)

價 定	
自卷一	各金四拾八錢
卷四	各金四拾參錢
卷五	各金四拾貳錢
卷七	各金四拾貳錢
卷八	各金四拾貳錢
卷九	各金參拾七錢

大度正臨	
自卷一	各金八拾六錢
卷四	各金七拾七錢
卷五	各金七拾七錢
卷七	各金七拾六錢
卷八	各金七拾六錢
卷九	各金六拾七錢
年價	
自卷一	各金八拾六錢
卷四	各金七拾七錢
卷五	各金七拾七錢
卷七	各金七拾六錢
卷八	各金七拾六錢
卷九	各金六拾七錢

編者 芳賀矢一

東京市神田區通神保町九番地

發行所 兼 合資會社 富山房

代表者 坂本嘉治馬

東京市小石川區音羽町六丁目

印刷所 富山房印刷工場



發行所

東京市神田區通神保町九番地

合資會社 富山房

電大手六三七〇、七〇二三番
振替東京五〇一三番

庫
5
59

広島大学図書
2000301559
